『日本案内記』に見る国立公園の旅行記事に関する一考察（2）
―昭和初期における観光文化研究―

谷沢　明

要旨

本稿は、景観をとおして探る観光文化研究の一環として執筆したものである。昭和初期、鉄道省が編纂した『日本案内記』（全8巻）は、きわめて高水準な旅行案内書として高い評価を得ている。同書には昭和初期の観光地の状況がつぶさに記述され、当時の観光地の姿を知るうえで参考になる。と同時に、日本各地の自然景観の描写も詳細を極める。本稿では、戦前に指定された12国立公園を対象に、国立公園内における山岳・湖沼・峡谷・瀑布・温泉等の景観を中心とする記述に着目し、案内記事の解読をとおして、それぞれの景観の特色を明らかにする作業をおこなう。そして、大正期に流行した山河を巡る旅が、昭和期に入って国立公園を対象とする自然を巡る観光旅行にいかに展開をみせたかを明らかにする手がかりを得ようとするものである。

はじめに

本稿は、鉄道省『日本案内記』（全8巻、昭和4～11年刊行）に記載された、戦前に指定された国立公園の旅行記事を資料として、昭和初期における観光地の状況、観光の在り方を探るとともに、大正期に流行した山河を巡る旅が、国立公園を対象とする観光旅行にどのような形で収斂したかを明らかにすることを目的とする観光文化研究である。本研究は、拙稿「『クーポンで國立公園めぐり』に見る遊覧旅行の一考察」[1]の視座を引き継ぎ、前稿「『日本案内記』に見る国立公園の旅行記事に関する一考察（1）」[2]において12国立公園の記載項目を比較検討することにより、それぞれの国立公園の性格を浮かび上がらせ、次いで「旅行日程案」および交通状況の検討をとおして、鉄道や自動車利用の交通網の発達が、民衆の観光旅行の隆盛を促していた様子を指摘した。

本稿では、大正期に流行した山河を巡る旅が、昭和期に入って国立公園を対象とする自然を巡る観光旅行にいかに展開をみせたかを明らかにするため、『日本案内記』の記述内容をより細部にわたって検討することとする。なお、本書には、国立公園内にある山岳の登山案内が少なからず含まれているが、これは専門的一分野を成し、今回のテーマとするところの「自然を巡る観光旅行」からややそれるため、対象から除外する。

以下、『日本案内記』に記載された案内記事の解読をとおして、昭和初期の国立公園の姿を探っていきたい。

1．阿寒国立公園

阿寒国立公園では、湖沼（阿寒湖・屈斜路湖・摩周湖・ペンケトー・パンケトー）、山岳（雌阿寒岳・雄阿寒岳・摩周岳・硫黄山）、温泉（阿寒湖畔温泉・雄阿寒温泉・雌阿寒温泉・川湯温泉・和琴温泉）等の項目を中心に記述がされている。また、雌阿寒温泉の記述の中にオンネツト湖（オンネトー）が、他に横断道路の記述の中に双湖台展望台があることが注目される。

昭和初年の阿寒国立公園探勝には四つの交通路が利用されていた。一つは釧路市内の大楽毛駅あるいは雄別炭鉱鉄道舌辛駅から自動車で雌阿寒岳の東側山腹を越えて阿寒湖畔に達するルート[3]、二つ目はその逆ルートで相生線北見相生駅から自動車で釧北峠を越えて阿寒湖畔に達するもの[4]、三つ目は美幌駅から自動車で美幌峠を越えて屈斜路湖畔・川湯温泉を経て南下して弟子屈に至るルート[5]、四つ目はその逆ルートで釧路線弟子屈または川湯から美幌に至るもの[6]である。なお、阿寒湖と屈斜路湖を結ぶ道路はあるものの、乗合自動車の便がなく、「阿寒地帯の探勝には右の如く阿寒カルデラと屈斜路カルデラを繋ぐ横断道路に自動車路線が無いので、釧路市、野付牛町または網走本線足寄駅より貸切自動車に頼つて、全コースを廻遊する方法が行はれて居る。足寄駅から阿寒湖へは雌阿寒岳の西側山腹を越えて行くのである」[7]と、記されている。

湖沼の記述を整理すると以下のとおりである。阿寒湖の景観については、「湖岸一帯は非常に変化に富み、東方雄阿寒岳の山麓から北方にかけて奇岩怪石重畳し、純粋の原始林が水面に迫って物凄い景観を呈し、湖面は雄阿寒の山煙傾映し、（中略）四島を浮かべて、美観を添へて居る。湖の東南隅から流出する阿寒川の落口に当る滝口は十九の小列島を浮べて、宛然小松島の観がある」[8]と、変化にとんだ湖岸の景観や周囲の原始林が水面に迫った様を述べる。また、天然記念物のマリモや、カモイチップ（神魚）と崇められたヒメマスについてもふれている。

屈斜路湖の景観については、「その碧澄たる水境は常に藻琴岳、サマツケヌプリ、跡佐登（アトサヌプリ）等の英姿を映じ、風光雄大にして仙境の感がある。中央にトーモシリ（大島の意）と称する一島があつて中島とも呼ばれ、島岸概ね断崖絶壁で常に浪に洗はれ、その露す岩白く、樹木鬱蒼として繁茂し、紺碧の湖面に反映する様はさながら絵である」[9]と、湖面に映る山々や樹木の姿を称え、俗界を離れた清らかな土地である様を述べる。

摩周湖の景観については、「中央に高さ二五米の小島カムイモシリ（神様の居る島の義）があり、湖岸は二〇〇余米の絶壁を繞らし、東壁に接して怪奇な山容を呈するカムイヌプリ即ち摩周岳が聳え、三面は鬱蒼たる原始林に囲まれ、その樹間から見える紺碧の湖面は人をして一種凄愴の感を抱かせる」[10]と、原始林に囲まれた瑠璃色の神秘的な湖面を愛でるとともに、湖辺から望む斜里岳・雌雄の阿寒岳、釧路の街、厚岸湾の雄大豪壮な景観の眺望をも紹介する。

ペンケトー・パンケトーの景観については、「この一帯は処女地で原始林に囲まれて紺碧の水を湛へ、幽邃陰凄の神秘境をなして居る」[11]と、その神秘的な湖の原始性を称える。また、当時、横断道路の双湖台近くから下りて両湖畔を歩いて阿寒湖までの約16キロメートルの遊歩道が開かれた旨が記されているが、現在、双湖台からペンケトー、パンケトーを巡

る遊歩道は存在しない。

山岳の記述を整理すると以下のとおりである。まず、雌阿寒岳・雄阿寒岳については、いずれも阿寒湖の景観に重要な役割を演ずる山であることを指摘する。雌阿寒岳の景観については、「山腹から山麓にかけては原生林に覆はれて阿寒特有の静寂な森林美をなして居るが、山頂付近は偃松と高山植物、熔岩礫帯の明朗な展望美に優れて、阿寒の大観に良い」[12] と、静寂な森林美と展望美に優れることを述べる。

雄阿寒岳については植生についての記述が中心で、「山麓から千米位までは椴松、蝦夷松の針葉樹林は密林で、山頂付近は岳樺帯となり、喬木林から偃松帯となつて、頂上は『いわうめ』が最も多く、美しい御花畑をなして居る」[13] と、標高による植生の変化を述べ、併せて眼下に阿寒湖を望むとともに、釧路平野・十勝平野まで見渡せる眺望[14] を紹介する。

摩周岳ついては、「休火山で火口壁内は樹林が鬱蒼と繁茂して居り」[15] と、火口壁内の鬱蒼たる樹林の様に触れるとともに、太平洋･オホーツクを望む広濶雄大な眺望[16] を紹介する。

硫黄山については、「全山爆発の残骸をなし、熔岩累々として一大奇観を呈して居る。（中略）山麓から頂上に至るまで大小数十の噴気孔があつて、百雷の如き大音響を発し、硫気を噴出して…」[17] と、今なお活発な火山活動の様を描く。また、山麓の景観･植生について、「山麓方二〇粁の間坦々たる火山礫高原をなし、白樺点々たる中に、『いそつつじ』、偃松が密生して居る」[18] と、述べる。なお、硫黄山の山麓一帯は「躑躅原」とも呼ばれ、「麝香石楠花木一名細葉躑躅の所謂『いそつつじ』の密生せる自然園があつて､六月中旬から一斉に開花し、恰も白絹を張れるが如く、香気芳烈である」[19] と、別に一項目を設けて解説する。なお、硫黄山には小規模の硫黄精錬所があったことが記載されているが、現在、精錬所は廃されている。

温泉の記述を景観とその利用を中心に整理すると以下のとおりである。阿寒湖畔温泉[20] については､「温泉場は阿寒湖畔にあり､阿寒湖探勝､雌阿寒､雄阿寒の登山根拠地である。（中略）付近の湖畔にはボツケと称する火山活動の余韻を止むる数箇の爆発口あり、付近には高温の硫黄泉を湧出し、露天の浴槽を設けてある」[21] と、阿寒湖探勝や登山基地であることを記す。湖畔に見られる泥火山であるボッケ[22] は、阿寒湖畔エコミュージアムセンター北方に現存する。

雄阿寒温泉については、「雄阿寒嶽の南麓、阿寒湖から流出する阿寒川の滝口近くにあり、風光の勝境を占め、雄阿寒嶽の登山口である」[23] と、周囲の景色が優れていることを記すが、この温泉は、現在、廃湯となっている。

雌阿寒温泉については、「雌阿寒岳の西南山麓にあり、原始林に囲まれて居る。足寄方面からの雌阿寒登山口である」[24] と、原始林に囲まれた地にあることを記す。ここで注目されるのは、雌阿寒温泉から約 2 キロメートル離れたオンネトーが雌阿寒岳、阿寒富士眺望の勝地として併記されている点である。オンネトーはオコタンペ湖（支笏洞爺国立公園）、東雲湖（大雪山国立公園）とともに北海道三大秘湖とされている湖であるが、昭和初期にはさほど有名ではなかったことが、独立項目がないことからうかがわれる。

川湯温泉[25] については、「温泉場は硫黄山北麓礫土高原の盡くところにありて千古の原始林に囲まれて居る。泉源はセセクベテ川河床の到るところに湧出し、泉量豊富、文字通り敷

条の湯川をなし、合して一条の川となつて屈斜路湖に注いで居る。（中略）付近には赤蝦夷松の純林と白樺林があり」[26] と、原始林に囲まれた地の河床に湧き出した温泉場の姿が記されている。ここに記されたアカエゾマツの森は、川湯エコミュージアムセンター周辺に広がり、今日、保全されて自然探勝路が設けられている。

屈斜路湖畔には温泉の湧出するところが散在し、「主なものを挙ぐれば、南岸に池の湯、赤沼、砂湯、仁伏、南岸に和琴などがある。（中略）現在宿泊の便宜あるは仁伏のみである。砂湯はキャンプの適地で、湖畔の砂浜を掘れば自然に熱泉が湧出する」[27] と、仁伏温泉と砂湯の姿に触れる。宿泊施設はないものの和琴温泉については一項目を設け、「和琴は屈斜路湖畔中最風景美に富む和琴半島に湧出する温泉で、岩を掘って浴槽とした天然風呂があり、原始的な気分が横溢して居る」[28] と、周囲の風景美と野趣に富む様を記す。なお、和琴半島には今なお原生林が残されている。

阿寒国立公園の記述で注目されるのは、弟子屈から阿寒湖に至る 42 キロメートルの横断道路（阿寒横断道路・国道 241）である。その記述は、「山また山を縫うて近年開鑿されたもので、横断道路と云ひ貸切自動車約二時間半を要する。沿道は蝦夷松、椴松の針葉樹林をはじめ、白樺、『やまうるし』、『ななかまど』の混淆した原始密林である。途中阿寒岳、阿寒富士を望む双岳台、パンケ、ペンケの両湖を俯瞰する双湖台の二展望台がある」[29] と、エゾマツやトドマツなどの原始林の中を通り抜ける魅力的な道路である様を記す。この阿寒横断道路は、昭和 3 年から 2 年がかりで開削され、その結果、阿寒国立公園の探勝がきわめて便利になった。

大正 12 年、内務省衛生局によって国立公園候補地が 16 カ所指名されると、北海道では大沼公園、登別温泉、そして阿寒湖の三か所が選ばれた[30]。ちなみに阿寒湖は、大正 10 年にマリモが国の天然記念物に指定されており、知名度が高かった。昭和 2 年、国立公園指定運動が全国的に盛り上がる中、阿寒湖に摩周湖と屈斜路湖を加えた三湖を網羅する公園構想のための運動が開始された。そして、昭和 6 年にはその実現を目指すべく「阿寒国立公園期成同盟会」が結成されて昭和 9 年に阿寒国立公園指定に至るが、阿寒横断道路の建設は、まさにその国立公園指定運動の盛り上がりの中で着手されたのである。

２．大雪山国立公園

大雪山国立公園では、山岳（大雪山･十勝岳･石狩岳等）、峡谷･瀑布･湖沼（層雲峡･天人峡･羽衣の滝・然別湖・仙翠峡）、温泉（層雲峡温泉・愛山渓温泉・松山温泉・吹上温泉・然別湖畔温泉等）等の項目を中心に記述がされ、ほかに十勝岳スキー場の記載もみられる。

大雪山国立公園には、四つの探勝拠点があった。層雲峡温泉[31]・松山温泉[32]・吹上温泉[33]・然別温泉[34] である。層雲峡温泉へは石北線上川駅、吹上温泉へは富良野線上富良野駅、松山温泉へは旭川電気軌道東川駅、然別温泉へは北海道拓殖鉄道瓜幕駅の四方面からから自動車に乗り換えて向かった。なお、松山温泉は現在の天人峡温泉であり、当時は忠別から徒歩 18 キロメート、所要 4 時間半の道程で、恐ろしく辺鄙な地であったことがわかる。また、松山温泉から旭岳に向けて登り 6 時間の山道があり、黒岳を経て層雲峡に通じていた。今日、大雪山国立公園探勝地の一つとして人気の高い旭岳（大雪火山群の主峰）には山麓の旭岳温

泉からロープウエイが架かり、昔日の感を深くする。

山岳の記述を景観や植生を中心に、スキー場を含めて整理すると以下のとおりである。大雪山は、旭岳・黒岳を中心に詳細な登山案内が記載されているが、併せて景観や植生の記述も豊富である。旭岳は、「夏尚万年雪や雪田、雪渓を輝かし、その間を濃緑な偃松帯と絢爛たる御花畑が交錯して一大楽園を形成して居る。高山植物の生態及その御花畑の群落の多き点は、おそらく日本北アルプスを凌賀する。動物も熊『りす』を見ること多く、特に『なきうさぎ』はこの山彙独特のものである」[35] と記し、山頂に生ずる植物群落は我が国第一級のもので学術上価値が高い、と称賛する。また、「山腹は概ね岳樺帯をなし、それ以下は山麓まで椴松蝦夷松の大原生林が繁茂して、黒々と山肌を包んで居る」[36] と、トドマツ・エゾマツからダケカンバ帯への植生の変化を述べる。なお、特記事項の「なきうさぎ」は、昭和3年に発見されて当時注目を集めていたエゾナキウサギ[37] のことである。

黒岳は、「黒岳頂上までは二十丁目あたりから岳樺帯となつて林は急に明るくなり、十六丁目の指導標から偃松が現はれ、次第に草本帯となり、十丁目あたりから『しなのきんばい』、『みやまきんぽうげ』、『はくさんいちげ』などの御花畑となって…」[38] と、標高による植生の変化と高山植物について記す。

十勝岳については、まず昭和元年の爆発の様子を紹介し、「大雪山と共に最も大衆化された山で、登山者も多く、また冬季はこの山腹にある吹上温泉を中心として山岳スキーの理想郷であり、北海道四大スキー場として著名」[39] と、北海道の山岳としては最も大衆的で、全国的に有名で登山者が多いことを述べる。

大雪山国立公園には、前述したように北海道有数のスキー場が設けられた。山岳スキーの理想郷として、十勝岳をはじめ三段山・上ホロカメツトク山・富良野岳・美瑛岳を挙げている。その一つである十勝岳スキー場については、「雪質は理想的な粉雪で、吹上温泉を中心として幾多興味あるスキー登山、ツーアコースを選ぶことが出来、北海道に於ける代表的なスキー地として、冬季は合宿訓練が盛んで非常な混雑を見せる」[40] と、北海道を代表するスキー場であり、スキーヤーのためのヒュッテが建てられていることを紹介する。また、十勝岳山麓にある吹上温泉付近のスキー場について、「温泉付近は椴松、蝦夷松と岳樺の大きな林で、到る処林間滑走が愉快である。泥流スロープに出ると、雄大なスロープが拡がり、十勝岳を仰視することが出来る」[41] と、十勝岳の景観を楽しみながらスキーができる魅力を説く。

もう一つは大雪山周辺のスキー場であり、「最近愛山渓温泉を中心としてスキー登山が盛んに行はれる。地形、雪量、雪質から見て、大雪山一帯は十勝岳以上に多くの優秀なゲレンデを持つて居り、北海道四大スキー場としてスキーヤーの憧憬の的となって居る」[42] と、なだらかなスロープのあるゲレンデの魅力を述べる。大雪山周辺のスキー場の拠点は愛山渓温泉（旧直井温泉）で、石北線安足間駅から「馬橇」が通じていた。この温泉にも旅館が新築されて、大雪山スキー登山の根拠地となっていることを紹介する。このように、大雪山国立公園の山岳の魅力は、景観もさることながらスキーによるところが大であることが記載事項から伝わる。

石狩川源流の石狩岳についても詳細な記事が出ているが、登山案内のため省略する。[43]

峡谷・瀑布・湖沼の記述を整理すると以下のとおりである。大雪山国立公園の代表的な見

所として、石狩川上流にある峡谷・層雲峡が挙げられている。層雲峡については、断崖の奇岩怪石と瀑布の織り成す景観を余すことなく伝える。その描写は、「上川から約一二粁の層雲別付近から勝景が始まり、一六〇米余の大岩壁が両岸に聳え、七賢峯、寿老岩、孤蝶岩、残月峯、地獄谷等種々の景観を呈して居る。層雲峡温泉付近には遊神峯、映月峯、不忘峯、夏雲峯等が連立し、河中に蓬莱岩がある。（中略）層雲橋から上流へ約二粁行くと、一六〇米の断崖に流星、銀河の大瀑布が懸つて居る。いはゆる雌瀑、雄瀑である。更に進めば遊仙台、雲井滝、柱状節理を見せて居る大絶壁天城岩がある。羽衣岩、姫岩のある辺は小函と呼ばれ、ここから大函に至る二粁余は針濶混淆の原生林あり、無数の岩崖があり、何れも絶景と云はれる」[44] と、岩石に名づけられた呼称を一つずつ挙げて、詳細を極める。また、本文中に挿入された俯瞰絵図には奇岩怪石や瀑布の名前がことごとく記されており、これを基礎にすると思われる観光案内図が今なお使われているのは、驚くべきことである。

忠別川上流にある渓谷・天人峡は、交通不便なところながらも優れた景勝地であった。その景致の描写もまた写実的で、「忠別川の渓谷約四粁の間を云ひ、また勝仙峡の名に呼ばれて居る。燕岩を仰ぐあたりより景致漸く加はり、渓深く急流に轟々の響きをあげて居る。更に進めば柱状節理を示した百数十米の絶壁約二粁の長さに亙つて聳え立ち、所々飛瀑の落つるを見る。それより剣岩、地蔵岩、獅子岩、屏風岩等の奇岩を見つつ進めば峡底忠別川に面して松山温泉を見出すのである」[45] と、断崖の岩や瀑布を眼前にしているかのように記す。なお、天人峡の上流にある羽衣の滝については一項目を設け、「北海道第一の滝と称せられ、火山岩や集塊岩の絶壁を三段になつて落下して居る」[46] と、落差 **230** メートルにおよぶ壮麗優美な滝の情景を記す。

大雪山国立公園は阿寒国立公園に比べて湖沼が少ないが、十勝平野の北方に然別湖がある。然別湖については、「中央に弁天島が浮び、湖辺原始林が繁り、高山植物が発生し、遠くウペペサンケヌプリやニペソツ山の白雪も望まれる。初夏の躑躅と秋の紅葉は佳麗である」[47] と、湖辺の原始林やツツジや紅葉の素晴らしさを述べる。併せて、然別湖畔の温泉旅館は遊覧船を持っていたことをも記す。

然別湖の北東の音更川の上流に位置する渓谷・仙翠峡も景勝地として知られていた。仙翠峡については、「この渓谷を挟む岸壁はさまで高くはないが、碧流、激湍、深淵相連り、屏風岩、猿飛岩、弓ヶ瀬、大函、小函、竜門の滝などの勝がある」[48] と、景勝地の見所を記す。とりわけ竜門の滝は、遡上する鱒の群がこの滝を跳躍することが盛んであり、付近に鱒見の岩があってその様子を見ることができる、と述べる。

温泉の記述を景観とその利用を中心に整理すると以下のとおりである。層雲峡温泉については、「石狩川の清流に臨んで鬱蒼と繁る蝦夷松、椴松等の原始林に囲まるる幽邃境で、北方からする大雪山登山の根拠地である」[49] と、物静かで奥深い地であること記す。愛山渓温泉については、「海抜約一、一〇〇米、付近は原始林である。（中略）近年この方面からの登山者も多くまた冬季は大雪山スキー登行の根拠地となる」[50] と、原始林に包まれた様を記す。松山温泉については、「天人峡（勝仙峡）の奥にある温泉場で、南からの大雪山登山の準備地として夏期は利用される。（中略）付近には烏帽子岩、短冊岩、法師岩、羽衣の滝、二見の滝、幣の滝などの勝がある」[51] と、周囲の見どころを含めて記す。吹上温泉については、「付

近は針葉樹の原始林で、西方富良野平野が俯瞰される。夏期はここから大雪山への縦走を試みるものがあり、冬季は北海道有数の山岳大スキー場としてその雄名を知られて居る」[52] と、針葉樹の森に囲まれた様を記す。然別湖畔温泉については、「森林に囲まれた神秘的な小沼があり、沼から五〇〇米にして湖畔の銚子口に出で、湖岸に沿うて一粁半進めば温泉場である」[53] と、途中の見所を含めて記す。

大雪火山群・十勝火山群・然別火山群で構成される大雪山国立公園は、日本最大の面積を有する公園である。ここは大正12年の国立公園候補地16カ所には含まれていなかったものの、大沼、登別温泉を引き抜いて、昭和9年に阿寒国立公園とともに指定された。アイヌ語で「カムイミンタラ」、すなわち「神々の遊ぶ庭」と称される大雪山は、雄大な山岳・峡谷景観に恵まれるとともに、山麓に登山基地となり、スキーが楽しめる温泉地を控える魅力がある。それらのことが、のちに自然豊かな観光地として発展する一要因になった、といえるであろう。

3．十和田国立公園

十和田湖と奥入瀬渓流は、交通の発達に伴って注目を集めるようになった東北地方有数の景勝地である。[54] 十和田湖をはじめとする東北地方の山水の美は、「山容水態岩相樹姿の妙趣に加ふるに季節天候に伴ふ風致の変化があり、全国屈指の秀景をなして居る」[55] と、季節による変化をみせ、全国的に優れた景観である、と記述する。

十和田国立公園については、湖沼である十和田湖、渓流である奥入瀬渓流が記述の中心であるが、他にも八甲田山、温泉（蔦温泉、酸ヶ湯温泉）の記述がみられる。八甲田山は、主として登山を目的とした記述であるため省略し、ここでは、十和田湖、奥入瀬渓流に絞って整理したい。

十和田湖探勝については六つの入口があった。奥入瀬口･三戸口･毛馬内口･小坂口･黒石口･八甲田越道である。その中で主に交通の便のよい奥入瀬口[56]と毛馬内口[57]が利用されていた。奥入瀬口へは東北本線古間木駅（三沢駅に改称）から十和田鉄道に乗り換えて三本木駅に至り、そこから自動車の便を利用した。また、毛馬内口へは奥羽本線大舘駅から秋田鉄道に乗り換えて毛馬内駅（十和田南駅に改称）に至り、そこから自動車が発着していた。

『日本案内記』本文に挿入された十和田湖の地図の解説[58] に、十和田湖への交通路と遊覧のあらましが出ている。簡にして要を得ているので引用する。「遊覧者ハ普通奥入瀬川ニ沿ウテ子ノ口ニ至リ船ヲ湖上ニ浮べ御倉中山ノ両半島ヲ経テ休屋ヨリ十和田神社ニ詣テ更ニ生出ニ至リ上陸和井内鱒孵化場ヲ見発荷峠ヲ越エテ大湯ニ向フ」。この記述により、昭和初年の観光コースの概略を知ることができる。

十和田湖関係の記述は十和田湖・湖上遊覧等があり、とりわけ湖上遊覧が詳細を極める。十和田湖遊覧の季節は5月から11月上旬までであり、「五月は桜、つつじ、藤、六月は新緑の美あり、夏は湖畔の気温最高二四度、最低一二度で、避暑に適し、月夜の舟遊が甚だ興が多い。秋は満山の紅葉燃ゆるが如く樹種多きにより色に変化あり、その美観多く類を見ない。特に十月中旬がよい」[59] と、それぞれの季節ごとの魅力を述べる。

当時の湖上遊覧のコースは、子ノ口から御倉、中山の二半島を経巡り、休屋に立寄り生出

に至るものであった。子ノ口から御倉半島北端を目指す船中から、外輪山である青撫山・御花部山・御子嶽・高山が見え、湖面に山影を映す。[60]

御倉半島の北岸には絶壁が立ちはだかり、急峻な傾斜面があった。御倉半島にはさまざまな樹木があり、「姫小松、赤松、ななかまど、いたやかえで、なら、はんのき、ほう、かつら、やまぎり、やまざくらなどの樹木が生ひ茂り、水際の岩面にはいわつつじ、どうだんつつじなどがからむ。初夏には新緑が美しく、仲秋には紅黄とりどりの変色が見事である。葉の色の真紅になるのはななかまどで、黄色になるのはいたやかえでで、それが特に麗はしく感じられる」[61] と、新緑や紅葉の美しさを紹介する。

御倉半島八雲崎から千本松にかけての見所の記述は詳細を極める。長文であるが、以下抜粋すると、「半島の北端（八雲崎）から一粁半で日暮崎に達する。ここには水面から直立する火山岩の上に赤松が茂り、その下には平坦な岩礁がある。船を繋いで岩上に立てば中海の大観をすることが出来る。（中略）日暮岬から中湖の湖岸に沿うて進めば比翼松、神代ノ浦を過ぎ鴨眠崎に至る、ここには赭色の岩の間に御室と云ふ洞窟がある。その次には赤色の酸化鉄を多く含む集塊岩より成る赤根岩がある。そのあたり高く見上ぐれば千丈幕岩が長く連る。これは同じく集塊岩でその上にはぶなの林があり、下には黄、茶、紫、赤、黒などの色を呈する火山熔岩、火山灰の互層が見える。これを色割岩または五色岩と名づける。更に安山岩より成る烏帽子岩、屏風岩、火山岩の節理により上部の崩壊した剣岩などを見て千本松に至る」[62] と、記す。ここに紹介された御倉半島の見所である八雲崎･日暮崎･中海･比翼松･鴨眠崎・赤根岩・千丈幕岩・五色岩・烏帽子岩・屏風岩・剣岩・千本松は、今なお、遊覧船の案内ポイントとして受け継がれている。とりわけ、屏風を立てたような千丈幕岩、色とりどりの火山熔岩と火山灰の互層から成る五色岩の景観は圧巻であり、観光客に人気が高い。

次いで、中山半島の記述へと続く。まず、御占場から千鶴ヶ崎にかけての東岸の景観について、「水際に近いあたりは赤紫色を呈する集塊岩が多く、その水に接する処は波浪に浸蝕されて凹み込んでいる。そこに波が入つて岩に打ちかかると、その音が反響して美しい音色が聞こえる。高い処には姫小松の純林が見える。業平岩、千代の浦、小町岩、千代ヶ崎を過ぎ千鶴ヶ崎に至る」[63] と、中湖の火口壁として形成された奇観を紹介する。

次いで、千鶴ヶ崎から中山半島の北岸の見越までは、「千鶴ヶ崎から中山半島の北岸を進み赭色の集塊岩よりなり赤松を戴く蝋燭岩を見る、更に西北千鳥ヶ浦に至れば、半島のくびれて船中から西湖の水面を望み得られる処がある。ここを見越と云ふ」[64] と、記述する。

さらに、見越から尾上松に至る中山半島西岸の景観については、「見越を左に見て、夕暮松を眺め、葭野地と称し芦の生えて居る水の浅い処を過ぎる。それより更に権現崎、茱萸島、比翼松を経て暗黝色の複輝石安山岩の柱状節理を示す六方石を望み、尾上松に至る。尾上ノ松の眺めは湖中比類少い佳景である。（中略）半島の高き処には姫小松が生ひ繁り、湖岸には赤松が疎生し水際にはどうだんつつじが岩にからんで居る」[65] と、ヒメコマツ、アカマツ、ドウダンツツジの植生を含めて見所を述べる。

中山半島遊覧も終わりに近い尾上ノ松から休屋にかけては、「尾上ノ松から東南に向ひ瓢箪崎、高砂浦、蓬莱島を過ぎ自籠の入江に入る。入口には鎧島と兜島がある。（中略）更に進んで柱状節理の安山岩より成る恵比須大黒島を過ぎ休屋に着く」[66] と、蓬莱島・鎧島・兜

島・恵比須大黒島などの船中から目に入る島々を紹介する。子ノ口から休屋間約15キロメートルの湖上遊覧は、当時、モーターボートで約2時間を要した。現在の湖上遊覧は、中山半島の見所をいくつか飛ばしながら時間を短縮しているものの、基本的にこのコースを踏襲している。

次に、奥入瀬渓流についての記述をみていきたい。奥入瀬渓流の探勝は、焼山から始まる。最初の見所は紫明渓であり、「奥入瀬川渓谷の美はここ（焼山橋）から始まる。対岸に蔦川の落口を望み、南に折れると右に紫明渓が眺められる。楢、ぶな、栗、ほう、楓などの濶葉樹林の中を過ぎ惣辺橋を渡る、これから上流は殆ど支流がなく、河水は常に同水位を保ち、ここに特殊の植物景を示して居る」[67]と、ナラ・ブナ・クリ・ホウ・カエデなどの渓流沿いの植生を含めて、焼山から渓流美がはじまることを述べる。

次いで、奥入瀬の主要な見所である三乱の流から裸渡橋にかけての記述は、「河中にある岩石のために水が三分して流れる処を三乱の流と呼ぶ。ここは水際から緑の色が滴つて居る。左手には不動岩があり、右の林間には「石けど」の窟がある。これより尚進めば対岸に屏風岩が連りこれと斜に向き合つて、左に馬門岩がそそり立つて居る。駒止橋を渡り河流を左に見て進めば、阿修羅の流、八十島を経て裸渡橋に至る。この両橋の間いたやかえでが多く、奥入瀬随一の勝景である、ここを楓谷と云ふ」[68]と、阿修羅の滝・八十島付近が奥入瀬でもとりわけ風景が優れていることを記す。

さらに、雲井の滝から銚子の滝までの数々の滝について、「尚進めばこれから数多の瀑布が見られる。最初には左に雲井の滝が懸り右方対岸に白布の滝が絶壁中空の空洞から落下して居る。やがて河水の奔流白く泡立つ白銀の流、旋回環流して巴状を画く巴ヶ淵を見、対岸に白糸滝、不老滝、左に姫滝、友白髪滝、姉妹滝を眺め、進んで奥入瀬の全流一大瀑布となつて落ちるのを見る、これを銚子の滝または大滝と云ふ」[69]と述べ、大滝については、海洋から奥入瀬川を遡る鱒はここで前途を阻まれる、と記す。

ここに記された奥入瀬渓流の見所として紹介された紫明渓・三乱の流・不動岩・「石けど」の窟・屏風岩・馬門岩・阿修羅の流・八十島・雲井の滝・白布の滝・白銀の流・巴ヶ淵・白糸滝・不老滝・姫滝・友白髪滝・姉妹滝・銚子の滝は、今なお奥入瀬巡りの観光スポットとして多くの探勝者を集めている。

以上の記述から、十和田湖、奥入瀬渓流とも、主な見所はすでに昭和初期に確立されていたことが明らかになる。景勝地としての十和田の名声は、明治41年に十和田湖を訪れた大町桂月により、全国に情報発信されたことは周知のとおりである。奥入瀬渓流の入口である焼山には桂月の顕彰碑が立ち、碑文に「住まば日本　遊ばば十和田　歩きや奥入瀬の三里半」と刻まれている。その後、明治45年に青森県知事武田千代三郎の肝いりで「十和田保勝会」が発足し、十和田の自然保護と観光の振興を図る取り組みが始まる。そして交通の便が整えられた大正後期から昭和初年には、十和田湖および奥入瀬渓流は景勝地としてますます注目を集めた。そして昭和2年、十和田湖は「日本新八景」湖沼の部第一位に選ばれ、翌3年には「名勝及び天然記念物」に指定されたのである。そのような気運の盛り上がりの中で、本書は刊行されたのである。

４．日光国立公園

日光国立公園では、東照宮・輪王寺・二荒山神社等の史跡の委細を述べているが、奥日光の自然として山岳（日光火山群･男体山･日光白根山）、湖沼（中禅寺湖･湯ノ湖･菅沼･丸沼･大尻沼）、瀑布（華厳滝･裏見滝）、温泉（日光湯元温泉）等を取りあげるとともに、尾瀬（尾瀬沼・尾瀬ヶ原・燧岳・至仏山）についても丁寧に記述する。

日光火山群は、東方の月山から女峯赤薙山・小真名子山・大真名子山・男体山・太郎山・山王帽子山･三ツ岳を経て西方の白根山に至るもので、奥日光の山岳景観を形づくっている。この中の男体山をはじめ女峯赤薙山・小真名子山・大真名子山を総称して日光山という。なかでも関東の名山として知られる男体山については、信仰的登山が盛んなことを述べるものの、山岳景観そのものについては特段記していない。

日光白根山は、男体山の西北に位置し、群馬、栃木二県の境にある二重式火山である。ここでは、外輪山の一部である前白根山西麓にある火口原湖の五色沼を紹介するが、山岳景観の記述は特にみられない。

日光国立公園の湖沼として最も有名なものは、男体山の麓に位置する中禅寺湖である。当時、中宮祠から遊覧船が出ていた。湖畔の景観については、「湖畔は一般に樹木が繁茂して、秋季は紅葉が美しい」[70] と、ごく簡単に記すに過ぎない。

中宮祠の北方に位置する湯ノ湖については、「北岸の湯平を除いては三面山に囲まれ、湖畔は秋季紅葉の美観を呈する、排水口は南端にあり、岩石に堰れて二つに分れ後合して湯滝となる」[71] と、湖畔の景観と、湖が流れ落ちて湯滝になることを記す。湯ノ湖は、太朗山の熔岩のために渓谷が堰き止められて水を湛えた閉塞湖である。

日光白根山の西北麓に位置する菅沼・丸沼・大尻沼については、「周囲は針葉樹濶葉樹の繁茂する山側水に迫り、風景が甚だよい」[72] と記す。これらの三つの沼もまた、いずれも熔岩で渓流が堰き止められて形成されたものである。

日光を代表する瀑布に華厳滝がある。禅寺湖の吐口大尻東方に位置する華厳滝は、男体山から流れ出た熔岩が別の流路を堰き止めて形成されたものである。滝の姿については、「華厳滝の総高は約一〇〇米、幅は上部で約一〇米、滝壺は深さ二〇米、熔岩の下端は集塊岩状をなし、地下水はここにしぼられ、石英斑岩の直上より流下し、主瀑の両側に数条の小瀑布を作つて居る。水色は淡碧色を呈し、岸壁の前に直下し、極めて壮観を呈する。毎年四月から十一月までは岩燕多くこの岸壁に巣ぐひ、瀑前に群をなして飛翔する」[73] と、壮観な様を述べる。華厳滝は、岩燕が巣くうほど近寄りがたいところであった。この華厳滝を見物する場所として滝見茶屋や五郎兵衛茶屋があり、「滝を見るには太平で中禅寺道から左に分れ、滝見茶屋の処より滝見台に至り、高い処から眺めるのが、到達最も容易である。しかし十分に賞美するには滝坂を下り、白雲滝を経て、五郎兵衛茶屋に至り、下方より仰ぎ見るがよい」[74] と、その鑑賞方法を紹介する。

なお、明治中期までの華厳滝は、その全容を見ることは不可能であり、高所から滝の上半分を眺めるのみであった。この滝の全景が見える地点まで七年の歳月を費やし、明治 33 年に小径を開削したのが星野五郎平であった。そして、滝の鑑賞者の便を図るために、ここに記された五郎平茶屋 [75] が設けられた。

奥日光には華厳滝のほか、湯川の湯滝・竜頭滝、荒沢の裏見滝、田母沢の寂光滝など多くの優れた滝がある。これらの中では裏見滝が紹介され、「滝の懸る岸壁は下部は柱状節理のよく発達した石英斑岩で、…」[76] と、柱状節理の岸壁の奇観を記す。裏見滝は、舞い散る滝飛沫を浴びつつ柱状節理の岸壁を仰ぎ見て幽玄な地の空気を味えるが、今は訪れる観光客もまばらである。

温泉については、日光湯元温泉が取りあげられ、「地は海抜一、五五〇米、西に白根山、北に温泉岳、東に三岳の連山を繞らし、南の方ひとり開けて湯ノ湖の青藍に面し遥に男体山の偉大なる山容が仰がれる」[77] と、山間の湯の情景を述べる。また高所にあるため、紅葉は十月初旬すでに美観を粧う、とも記す。

当時、日光国立公園に含まれていた尾瀬では、尾瀬沼・尾瀬ヶ原、燧岳・至仏山登山について紹介する。群馬・福島県境にある尾瀬沼については、「燧岳北に聳えその他桧高山、皿伏山などに包まれ、それらの山々と付近の森林景観と湿原などが相調和して、人煙遠く神秘境を作つて居る。湿原特有な沢沼植物なども多く、東に奥日光の山脈が聳え、西約七粁に長径八粁、短径五粁に亘る尾瀬ヶ原の大湿原を持ち、その西に至仏山が聳えて居る」[78] と、人里離れた湿原の景観を記述する。と同時に、「この尾瀬沼及尾瀬ヶ原を繞る山岳と湿原と森林美は、関東に於ける特異な山岳美として、登山者の愛好の地であり、植物景観及生態学上見るべきものが多い」[79] と、植生の学術的価値を述べる。併せて、「静かな湖に舟を浮べて、湖畔に茂る針葉樹と湿原に咲き誇るにつくわうきすげ、みつばせう、あやめ、ふとゐ、その他湿原植物の景観と、山々の景を賞するのは旅心を満足させる」[80] と、その観光利用について紹介する。

尾瀬ヶ原については、「この大湿原は七月末、につくわうきすげ、かきつばたの開花期には百花妍を競うて美観を呈する。この他ながばのまうせんごけ、つるこけももなどを始め、湿原植物は数百種類を数へ、植物学上の宝庫として学究の徒の憧れの地であり、高原を愛し山岳を愛する人々の訪るべき処である」[81] と、ニッコウキスゲをはじめとする湿原植物の宝庫であることを強調する。なお、尾瀬沼・尾瀬ヶ原とともに、燧岳登山と至仏山登山を紹介するが、山岳景観についての記述はさほどみられない。

奥日光は、近代に入ると諸外国公使たちの避暑地として注目される。また、明治30年代には華厳滝が奥日光の傑出した風景として知られるようになり、馬返から「華厳道」をたどる奥日光への探勝者が増えていく。一方、尾瀬沼・尾瀬ヶ原は、湿原植物の宝庫として明治末期から知られ[82]、自然を愛するハイキング客人気の場所となっていた。このように、奥日光の自然は早くから注目を集めていた。やがて、それが観光地としての性格を帯びていくのである。

5．富士箱根国立公園

富士箱根国立公園では、富士登山の案内をはじめ、山岳（箱根山・二子山・大涌谷・硫黄山噴気孔・駒ヶ岳の炭酸孔）、湖沼（芦ノ湖・富士五湖）、箱根の諸温泉（湯本温泉・塔ノ沢温泉・宮ノ下温泉・底倉温泉・堂ヶ島温泉・小涌谷温泉・蘆湯温泉・木賀温泉・強羅温泉・大涌谷・千石原温泉・姥子温泉）等が記述されている。とりわけ、温泉の記述が多いのが特

徴である。ここでは、富士登山等は除外して温泉地を含めた山河の景観の記述を中心に整理する。

まずは、箱根について述べる。箱根山は、金時山をはじめとする外輪山[83]がほぼ環状に連なる二重式火山で、中央火口丘として、北から神山・駒ヶ岳・上二子山・下二子山の四つの山がある。箱根の記述は、「山体の東北腹には大涌谷、早雲地獄、湯ノ花沢などの爆裂火口を存し、現今尚水蒸気及硫気を噴出し、また温泉を噴出して居る。その中大涌谷は最も盛で泥水を湛ふる熱池、泥火山、硫質噴気孔、噴泉などがあり、爆裂の余勢を示し、爆裂の結果流出した泥流は千石原、宮城野などの火口原に達して居る」[84]とあり、火山活動の結果形成された地であることを述べる。また、芦ノ湖とその周辺の原野について、「火口原は蹄鉄状をなし、その西南部には水を湛へて蘆湖となり、その北に千石原、東北に宮城野原がある。これらの原野はもと湖底を存して居たものである」[85]と、火口原の形成について触れる。さらに、早川と須雲川について、「火口原の水は外輪山の一部を破つて火口瀬をなす。その北にあるものを早川と云ひ、南にあるものを須雲川と称す。（中略）宮ノ下、堂ヶ島のあたりは早川の外輪山を破る処で渓谷が極めて深い」[86]と、火口原から流れ出た二つの河川と、それが形づくる渓谷について記述が及ぶ。

箱根の火口丘である神山の爆裂火口として形成されたのが、大涌谷である。東南が地獄沢、西北が閻魔台と名づけられている。地獄沢については、「一面に盛に硫気が噴出し、また硫黄華が沈殿し、中には黝色の泥水を湛へた水池に、泥土と熱水を間歇的に噴出する処があり、また盛に水蒸気及熱水を噴出する処がある。この熱水を噴出する処に石室を設け渓水を注加して、強羅及千石原に送る」[87]と、硫気・水蒸気・温泉が噴出する火山活動の様を述べ、大涌谷が強羅・千石原の泉源になっていることを併記する。また、閻魔台については、「ほぼ東北の方向に排列する噴孔が八個あり、轟々の音を発して盛に水蒸気及硫気を噴出し、硫黄及石膏が噴孔付近に沈澱して居る。しかし温泉は湧出しない」[88]と、同様な噴出を記述する。大涌谷は、箱根の火山活動を実感できる場所として、また富士山や芦ノ湖の眺望を楽しめる場所として、今も多くの観光客を集めている。

箱根山上にある火口原湖が芦ノ湖である。芦ノ湖については、「湖畔の部落としては東南岸に元箱根、南岸に箱根町があり、その間の街道からは湖水を隔てて富士を望むべく、遥にその湖面に映ずる倒富士を見ることが出来る。湖上には元箱根及箱根町から東北岸の湖尻までの間遊覧船が通つて居る」[89]と、富士山の眺めと湖上遊覧を中心に紹介する。

箱根は、このように火山活動により生じたさまざまな景観、すなわち外輪山・裾野・陥没火口・火口丘・火口原・火口原湖・火口瀬・爆発火口・噴気孔などで特色づけられる地である。

箱根の諸温泉もまた、火山活動で形成されたものであり、その山水美と整った設備で東京付近第一の遊覧温泉郷として知られた。箱根の諸温泉のあらましについては、「温泉は多く早川の渓谷と、裾野に於て岩脈に胚胎するものと、神山の麓を周つて爆発火口に位するものとあり、湯本、塔ノ沢、宮ノ下、底倉、堂ヶ島、木賀、蘆湯を古来箱根七湯と称して居たが、今は小涌谷、強羅、千石、姥子を加へて十一湯を数へ」[90]と、立地および「箱根十一湯」の名前を記す。さらに泉質について、「最新火口丘たる駒ケ岳に近き蘆の湯は硫黄泉、大涌谷から曳いた強羅、千石と小涌谷は酸性泉、それより稍離れた姥子、木賀、底倉、宮ノ下は塩

類泉、それより尚離れた堂ヶ島、塔ノ沢、湯本は単純泉で、火山活動の時期と温泉の位置と泉質の間に面白い関係が現はれて居る」[91] と、火山活動との関係を記す。と同時に、遊覧・観光について、「箱根の遊覧は四季いづれにもよく、春は桜、秋は紅葉、夏は登山舟遊の楽があり、冬も避寒温泉の一に数へられる」[92] と、四季折々に楽しめることを紹介する。

本書では、「箱根十一湯」すべてを、それぞれ独立した項目を設けて触れている。まず、「箱根七湯」の記述について紹介する。湯本温泉については、「箱根山彙の東麓、火口瀬たる早川、須雲川の合流点にあり、翠色滴らんとする湯坂山の麓をめぐり、早川の清流に臨んで居る。名に負へる如く箱根最初の温泉開発地である」[93] と、早川の清流に臨んだ景観を記すとともに、付近の名所である早雲寺・正眼寺・玉簾の滝・初花の滝などを紹介する。

塔ノ沢温泉については、「塔ノ峯の南麓にあたり、早川の流の迂回してS字形をなして岩角の間をめぐる処に、橋を架け、道を開いて浴楼が軒を列ねて居る。明の朱舜水が水戸の光圀に従つてここに遊んだ時、支那驪山の温泉に優ると歎賞したので、玉の緒橋と相対する翠巒を勝驪山と云つて居たが、大正十二年の大震災の為に崩壊して可なりその風景美を殺がれた」[94] と、故事来歴および在りし日の風景美について述べるとともに、付近の名所である阿弥陀寺を紹介する。

宮ノ下温泉については、「旧火口の辺縁に位し、箱根諸温泉の中央にあるので、交通の中枢に当り、御用邸も設けられ、箱根第一の繁華地となつた。海抜四一七米、早川の水面より高きこと一一〇米、川を隔てて明神、明星の山巒東北方に長く連り、鷹ノ巣山の連峯西南より東に走つて湯坂山に続くところ、その裾合の間に相模湾の寸碧が見渡される」[95] と、箱根第一の賑わいを記すとともに、周囲の山々の景観について触れる。

底倉温泉については、「蛇骨川の涯畔にあり、温泉の由来古く、吉野朝時代には新田義則此処に金創を養つたが、鎌倉よりの追手に襲はれて戦死し、豊臣秀吉の小田原征伐の際は石風呂を築いて将卒の創傷を治せしめた」[96] と、故事来歴を記し、今も新田義則の記念碑や石風呂の址が残っていることを紹介する。

堂ヶ島温泉については、「早川の渓底にあり、渓水の懸つて滝をなすもの多く、葉陰の滝、調の滝、不動の滝、三日月の滝、白糸の滝などあり、白糸の滝に通ずる傍に夢想国師幽棲の堂址があり」[97] と、早川の渓谷美に触れる。

蘆湯温泉については、「海抜八七九米箱根最高の温泉場である。弁天山、宝蔵山、二子山などに囲繞せられ、盛夏涼気肌に迫るの幽境である」[98] と、幽玄な環境を記し、周辺の見所として元箱根石仏群（新羅三郎の笛塚・多田満仲の墓と伝ふもの・二十五菩薩・六道地蔵・曽我兄弟の供養塔・虎御前の塔）や精進池等を紹介する。

木賀温泉については、「早雲山爆発堆積物の東端を占め、早川の流れを洗つて急瀬をなし、渓流美を現して居たが水害の為に稍々その風致を損した」[99] と、渓流美が損なわれたことを記す。

次いで、「箱根十一湯」に数えられた四つの温泉の記述を紹介する。小涌谷温泉については、「神山の支峯蓬莱山山襞の傾斜地で、海抜五七六米、鷹ノ巣山、浅間山の二峯眉を壓し、遥に早川渓谷を隔てて明星、明神の二峯を望む。箱根温泉中最眺望美を有するを以て知られて居る」[100] と、眺望美に優れることを述べるとともに、一大遊園地を形成する様を紹介する。

強羅温泉については、「早雲山麓の傾斜地で樹木繁茂せる間、土砂流出の後に残された大小の岩塊処々に横はり、蘚苔、地衣その上を被うて高原の趣をなして居る。海抜七八八米、明神、明星の二峯に対し、早川の渓谷を俯瞰する眺がいい」[101] と、高原の魅力を語るとともに、駅に接して登山電車会社経営の遊園地があり、その周囲は別荘地として漸次発展している様子を記す。

千石原温泉については、「箱根最奥の温泉で閑寂の一境をなして居る。（中略）上湯下湯は別郷をなし、早雲山駅より西北約一粁半台ヶ岳の東麓にあり、同じく大涌谷より曳湯して居る」[102] と記し、文化的施設には欠けているが質素な浴場である、と述べる。

姥子温泉については、「冠ヶ岳の麓、大涌谷の西側にあたる崖下にある。（中略）冠ヶ岳は紅葉の名所である」[103] と、簡略に記す。「箱根十一湯」のいずれもが、山水の美に長けていることが、それぞれの記述から読み取れる。すなわち、湯に浸りつつ付近を逍遥して山水の美を愛でる、これが箱根の湯の楽しみ方であった、といえよう。

最後に、富士五湖について紹介する。富士五湖は、富士山の東北麓より北麓を巡り西北麓に連なる五つの湖、山中・河口・西・精進・本栖湖の総称である。いずれも富士山の噴起のために熔岩流に堰き止められて形成された湖である。富士五湖については、「五湖は富士を背景とし、季節の推移に従ひ、付近の植物景の変化を来し、絶佳なる風景を占有して居る」[104] と、富士山を背景にして、それぞれの湖が良さを発揮している様を述べる。以下、五胡の記述を見ていきたい。

富士五湖の最東部に位置する山中湖については、「湖畔には落葉松の疎生する草野が広く、緩傾斜を以て四囲の丘陵に連つて居る。明るさに満ちた湖水で西南に富士が仰がれる」[105] と、明るさに満ちたおおらかな風景を記すとともに、冬季は永く氷結してスケートに適し、湖畔にスキーの好適地があることを紹介する。河口湖については、「湖岸の屈曲に富むこと五湖中の第一位を占めて居る。湖中に鵜ノ島と称する一島を有し、その東に最深の水底一五米に及ぶ処がある」[106] と、屈曲のある湖岸の変化を記す。西湖については、「その最深点は七七米に及び、五湖中最大を示して居る。従つて水色は美しく…（中略）河口湖畔の船津ではこの湖の水を導いて飲料水として居る」[107] と、水の清らかさを述べる。精進湖については、「湖は富士の西北麓に位し東北西の三面は山に囲まれ、南の方のみ青木ヶ原の低地に接して居る。（中略）溶岩流は湖の南岸より湖心まで突出して居るため湖形は鹿の頭の如く見える」[108] と述べ、湖上の風光は内外人に讃美されていることを記す。富士五湖の最西部に位置する本栖湖については特に景観上の記載はなく、冬季も全部氷結することがない旨を述べるにとどまる。

近代に入った明治 21 年、東海道線の国府津駅から箱根湯本まで馬車鉄道が開通し、箱根は遊覧地としての要素を帯びる。大正 8 年には箱根登山鉄道が強羅まで開通し、同年には宮ノ下の富士屋ホテルが県下初の十二人乗り乗合自動車を走らせ、芦ノ湖へも交通の便が整えられ、箱根は行楽地としての性格を強めた。大正 3 年、箱根を国立公園にしようとする動きが始まるが、それが本格的な運動として展開されるのは、昭和 5 年以降のことであった。首都圏から交通至便な観光地としての性格が強い国立公園の箱根は、火山景観に特色づけられる山岳、湖、温泉と豊富な資源をもっており、それが山河を巡る観光旅行の手軽な行先とし

て恰好な場所であったことを、記述内容から読み取ることができる。

6．中部山岳国立公園

中部山岳国立公園では、その性格からして北アルプス[109]を対象とする山岳および登山の記述が多くを占める。

国立公園の自然である高山植物や動物については、「二千四五百米以上に於ては高山植物の発育甚だ良く、その種類も頗る豊富で、その美観はまさに他に比すべくもない。また雷鳥及かもしかの如き高山特有の動物も甚だ多い」[110]と、豊富な種類や美しい様を述べ、ライチョウについても触れる。また、火山活動と温泉については、「北アルプスの特色は諸所に火山活動のあることで、その主なるものは御嶽、乗鞍、立山等で、焼岳は現に活動を続けて居る。これ等の関係で諸所に温泉の湧出あり、立山温泉、白馬鑓温泉、中房温泉、上高地温泉、白骨温泉等山麓または山頂付近に散在し、登山休泊地根拠地として重要なる役割を演じて居る」[111]と、火山活動の山として御嶽・乗鞍・立山等・焼岳の存在を記すとともに、種々の温泉を紹介する。さらに、登山・山岳スキーについては、「近時登山熱の勃興に依り、幾多の縦走路は開拓され、山小屋の設備は完備して、年々登山探勝者の激増を来し、年二十万人以上に達すると云ふ。また山岳スキーとしても立山付近、乗鞍、白馬、薬師付近の如き約十ヶ月間のスキー期を有し、雄大なスロープを有して、逐年登山者の来訪漸次増加する勢である」[112]と、登山者が激増して約20万人が訪れている状況を記す。

中部山岳国立公園の山河を巡る記述として、ここでは、昭和2年に「日本新八景」渓谷の部第一位を占めた上高地渓谷をはじめ、白馬岳、立山、黒部渓谷に焦点を当てて整理してみたい。これら四か所は、今日、交通の便が整えられて、老若男女が比較的容易に足を運ぶことができる中部山岳国立公園の観光地として賑わうようになった地である。

上高地渓谷については、「北から西に穂高岳の連峯嶄然聳立してその壮麗な山姿を聳え、東に霞沢岳、六百山急峻に屹立し、南にアルプス唯一の活火山焼岳稍端麗な円錐形の山容に不断の噴煙を見せ、稍遠くに乗鞍岳雄大に聳え、四囲山を以て繞らされ、その間に梓川の清流の流るるあり、南北凡そ八粁に亘り、梓川流域に狭長な谷盆地を形成して、大正池の明鏡、田代、明神池の幽邃があり、温泉の湧出があり、海抜一、五〇五米の地に日本アルプスの粋を集めて、山岳美、渓流美、森林景観の美あり、一仙境を劃して居る」[113]と、梓川の流れや大正池・田代池・明神池を挙げて、山岳美・渓流美・森林景観の美を集めるところである、と記す。併せて、「日本アルプスの盟主、槍ヶ岳、穂高岳を初め、その他の登山根拠地として最たる地を占め、日本八景の一に数へられて近年著しくその名声を高め、登山、キャムピングの楽土として知られ、秋の紅葉美もまた有名である」[114]と、槍ヶ岳・穂高岳などへの登山基地としての位置を述べる。

上高地を特色づける梓川の景観については、「梓川の清流緩かに流れ、蜿蜒としてこの盆地を貫き、河畔に化粧柳を見、白樺の疎林絵の如く針葉樹の間に点在する。森林に囲まれて幽邃な田代池があり、南端、焼嶽下に大正池は碧水を湛へ、立枯の白樺林は水面に立並んで、四囲の山容を倒映して居る」[115]と、ケショウヤナギやシラカバの植生や、田代池や大正池のたたずまいを挙げる。さらに、上高地付近の植物については別項を設けて、「大正池から

温泉に至る部分には河畔に『をのへやなぎ』、『たにがははんのき』混生し、平地には『しらかんば』、『からまつ』、『にれ』を主とする林がある」[116] と、詳述する。大正池については、「大正四年六月の焼岳の噴火の際、泥流が梓川を堰止めて成生した極めて新しい湖であるが、正しく上高地の風景を一段美化して居る」[117] と、その生成を述べるとともに上高地の景観を美化するものとして評価する。

大正池を形成した焼岳については、「日本北アルプス唯一の活火山で、今なほ盛んに噴煙して居る。古生層の地磐に噴出した火山砂礫及び熔岩を堆積して生じた戴頭円錐形コニーデ火山で、峨々たる穂高連峯、六百、霞沢など、上高地四囲の山岳に比して、その山容は面白き対照をなして居る」[118] と、今も噴煙をあげている様とその山容を述べ、上高地から往復半日行程で婦女子でも容易に登ることができる旨を記す。

上高地の魅力については、「土地高燥空気清浄、夏知らぬ幽境である。六月の若葉、十月の紅葉の大観は近年宣伝せらるることとなつた。山岳熱の勃興により夏期は登山遊覧の客多く、一帯の地またキャンプ生活の適地として、宛然たるテント村を現出する。山岳、森林、湖沼、高原、渓流、瀑布、温泉など、この渓谷一帯の地はあらゆる風景の要素を集めて居るのである」[119] と、あらゆる風景の魅力が詰まった場所である、と述べる。そして、昭和初期の上高地が観光地化されつつある姿も知ることができる。[120]

上高地周辺の温泉として、白骨温泉・平湯温泉を取りあげている。当時、白骨温泉へは沢渡まで自動車の便があったが、それより4キロメートは歩かねば到達できなかった。白骨温泉については、「信飛両国の境にあり、北には焼岳、南には乗鞍岳が峙ち、日本北アルプス登山準備地の一として知られて居る。（中略）温泉は湯川の支流湯沢に湧出し、本湯、綿湯、疝気の湯あり、いづれも古生層の角岩及び石岩層の裂罅から炭酸瓦斯を伴うて涌出して居る。涌出口付近にはいづれも厚さ二三尺の石灰華、少量の石膏及び硫黄の沈澱がある」[121] と、石灰華の結晶による乳濁色の温泉の特徴を記す。

平湯温泉へは、夏季に高山から自動車が通じていた。平湯温泉については、「温泉のあるところは日本北アルプスの雄峯乗鞍岳の北麓、神通川の上流の渓谷の一盆地で海抜一、二三三米、旅館その他の民家を合せて二三十戸、如何にも山の奥の温泉場と云ふ感じのするところである。（中略）日本北アルプス飛騨方面からの登山口として夏季は大に賑ふ」[122] と、山奥の温泉場の風情を記すとともに、武田信玄が信州を侵した時その将山県某が発見したものという故事来歴をも紹介する。

北アルプスの最北端にある白馬岳については、「その雄大な山容は群峯中の重鎮である。飛騨山脈はこの白馬岳を起して山勢漸く衰へ、北陸海岸の親不知付近に到つて日本海に山足を没する」[123] と、雄大な山容を記す。また、その名の由来について、「普通『はくば』と読むが『しろうま』が正当で、古来暮春の頃になると頂上から北方に雪が消えて馬の形に岩が黒く現れる。信州側の里人はこれを農事暦として田の代掻をしたと云ふ。即ち代馬（しろうま）の意味が山の名の起源だと伝へられて居る」[124] と、代掻き馬の雪形に因むと説く。さらに、登山者については、「登山が比較的容易で日数を要しないのと、小屋の設備が整つて居り、大雪渓があり、お花畑の美はアルプス中最も優れて、その種類も豊富であり、展望の雄大な点など、あらゆる特色を備へて居るので知られ、特に婦女子の登山者が多いことはア

ルプス中随一である」[125] と、大雪渓やお花畑の美についてふれるとともに、登山が容易なため婦女子が多く訪れる、と記す。これは、すでに当時、白馬の観光地化が始まっていたことを示唆する記述である、と受けとることができる。なお、白馬連山高山植物帯については別項を設けて詳述しているが、委細は省略する。

北アルプスの西北端に位置する立山連峰[126] は、古来、富士山・白山と共に日本の三名山として数えられ、信仰的登山が盛んであった。その山容については、「雄偉な山容を聳え峥嶸たる花崗岩の山肌に多量の万年雪をちりばめた立山連峯の偉観は、南北アルプスを通じて二と下るものではない。槍ヶ岳と穂高岳はその高さと鋭さに於て立山連峯に優つて居るが、雪量に於ては及ばない。前者を『岩石の殿堂』とすれば、立山連峯は正に『氷雪の殿堂』である」[127] と、雪山では随一であることを述べる。

立山に向かう、藤橋（現、立山駅）から弥陀ヶ原に至る地質・植生等については、「藤橋から急な尾根について登ると、坂の中途に柱状の節理の玄武岩が露出して居る。この坂を材木坂と云ひ、登りつめると一平地に出で、またブナの森林帯の坂を登るとブナ坂の休憩小屋がある。藤橋から約四粁。ここからなほ約四粁で桑谷に達すると次第に針葉樹帯となり、姫小松の美林がある。（中略）しばらくすると森林帯が盡き、広大な弥陀ヶ原が展開して眺望開け、…」[128] と、ブナ林から針葉樹林帯への変化を記す。なお、ここに記された柱状節理の玄武岩が露出する「材木坂」は、立山ケーブル車窓から間近に見ることができる。

立山連峰登山基地である室堂については、「一帯は高山植物が豊富で夏季は一面美麗な御花畑を現出する。この小屋（室堂）から約半粁にみくりげ池がある、小火口湖で清澄な水を湛へ夏なほ残雪を浮べて居る、これを雪筏と称する。池から尚半粁西へ下ると地獄谷で、爆裂火口の名残を留め、周囲約四粁内外の間黄褐色の泥土を露出し、所々に硫気洞があり、熱泥沸騰するもの、温泉を噴出すものなどを多く見受ける」[129] と、高原の高山植物や火口湖・爆裂火口を紹介する。今日、アルペンルートのバスターミナルが設置されて気軽に到達できる室堂平周辺は、ミクリガ池から地獄谷を望むエンマ台にかけて自然探勝路が設けられ、立山の自然を巡る観光客で賑わっている。

立山周辺では、立山温泉が記載されている。ここは、富山県営鉄道千垣駅の東 22 キロメートルに位置し、藤橋から徒歩で向かう温泉であった。「温泉は立山登山者の休泊所で、常願寺川の上流、湯川の川畔に湧出し、（中略）付近には刈込池、薪湯、多枝原池、鰌池などの曳杖地がある」[130] と紹介されているが、現在は廃湯となっている。

黒部渓谷については、「黒部川は日本北アルプスの中心たる槍ヶ岳の西北鷲羽岳に源を発し、アルプス北半の高山峻嶺の間を貫き、蜿蜒約八〇粁に亘り、世にも稀なる最大最深なる峡谷をなして北流し、宇奈月付近に至つて始めて平野に開放され、日本海に注ぐ。大部分花崗岩によつて構成され、白い花崗岩の岸壁の間に碧譚激流をなして奔下するこの渓谷は、飽くまで緊張せる風景の連続的美観現出し、我国に於て他に比類なき幾多の渓谷美を有つて居る」[131] と、類稀なる深き渓谷の美観がうたわれている。

まず、「黒部川下廊下」と称する奥地の景観については、「立山連峯直下に於て両岸相迫り、直立に近き岸壁は、千米内外の壮麗な山骨を現して、未だ人跡を絶ち、原始的な神秘な境域をなして居る。この付近を黒部川下廊下と称して、渓谷の景観は最高潮に達する」[132] と、

前人未踏な原始性を述べる。ところが、その神秘的な渓谷を味わうためには一週間の日数がかかるため、一般観光客は容易に立ち入ることのできない秘境であることも併記されている。

一般的な黒部渓谷の探勝については、「宇奈月温泉から始まり、途中に鐘釣温泉があり、猿飛の奇勝があり、祖母谷温泉付近までで、この間は道もよく、充分に黒部渓谷の美観に接することが出来る」[133] と、祖母谷付近まででも十分に黒部渓谷の魅力に触れて特徴を知ることができる、と述べる。なお、黒部渓谷には、黒薙・二見・錦繍・鐘釣・祖母谷・阿曽原・仙人・東谷の諸温泉があって黒部探勝者の休泊所となっていた。

7．吉野熊野国立公園

吉野熊野国立公園では、吉野、大峰山脈と大台ケ原、熊野の三地域についての多様な記述がみられる。吉野では名勝・吉野山と数々の史跡、大峰山脈と大台ケ原では山岳と登山、熊野では名勝・天然記念物の瀞峡をはじめ豊富な温泉等について紹介されている。吉野・大峰・大台ケ原の山河については前稿[134] でふれたので、ここでは、熊野地方の山河について、景観の記述を中心に整理し、北山川の瀞峡、熊野川の九里峡、熊野地方の温泉（勝浦付近の諸温泉・湯川温泉・川湯温泉・湯峯温泉）について記したい。

瀞峡とは、「瀞八丁」と称す下瀞と、その上流の上瀞と、さらにその奥の奥瀞を総称する北山川の峡谷で、下瀞は約 1.3 キロメートル、上瀞は約 2 キロメートル、奥瀞は約 8 キロメートルの蛇行流路をなしている。それぞれの峡谷の特徴として、「下瀞は特に著しい断崖と深淵をなし、水深一六米、岸高五〇米に達するところあり、上瀞は深淵浅瀬相連り、水の深さ岸の高さもまた減じ、浅瀬のところは舟の上下に困難なところもあり、奥瀞に至れば岩石には柱状節理が表はれ、奔流岩に激して水声高く凄味を帯びた峡谷美をなして居る」[135] と、下瀞の断崖深淵、上瀞の深淵と浅瀬の変化、奥瀞の激流の様を述べ、「瀞峡の風景美はその清き水と、奇しき岩と、緑深き老木との三つが諧調をなすところにある」[136] と、その風景美を要約する。

さらに、その景観の見事さを、「日本にすぐれた山水は多い。美しい渓谷も多い。しかし瀞峡の如き自然の大屏風の絶壁が長く続いて、その上に斧鉞を入れぬ原始林を戴き、玲瓏玉の如き碧淵にその影を映ずる景致は他に殆ど類例を見ないのである。この風光を見るには躑躅、石楠花、空木などの岩間に粧ふ新緑の頃か、ほととぎすの哀韻や河鹿の涼しい歌を聞く夏か錦繍赤く染むる所謂『紅葉の瀞』の秋がよい」[137] と、屏風のような断崖絶壁と碧淵の織り成す光景を称え、それぞれの季節における峡谷の味わいを記述する。

瀞峡の中で有名なのは、下瀞である。その入口が洞天門である。洞天門については、「門を入ると両岸俄に相迫つて長く連り瀞特有の懸崖船を壓するが如く感ぜられる。（中略）岩は多く直立して柱状節理を現し、風化の為に黝色の物さびた色を呈して、その上に鬱蒼たる樹林を戴き流るとも見えぬ碧潭に倒映する様は、全く静寂そのものである」[138] と、両岸に迫る懸崖と碧潭の織り成す光景について描く。

洞天門から峡谷を遡る描写は、奇岩怪石の峡谷美を余すことなく続く。長文になるが引用すると、「洞天門を入ると左に両岩相並んで立てる夫婦岩がある。更に進めば右には小岩礁の相並んで屹立し、恰も蓮の花の開けるが如き蓮華島があり、左には亀岩がある。やがて右

には巨材の如き一岩盤が滑り落ちてその上方は尚岸の岸壁に凭れかかりて水面に石門を作つて居る滑り岩が見え、それに対して左には高さ二〇米、幅八七米の屏風岩の絶壁あり、そのあたり瀞水紺碧の深淵をなし、最も神秘的の光景を呈する。そこを過ぐれば左には烏帽子の形をした烏帽子岩、右には天の岩戸、昼島があり、高さ三七米の天柱岩が大空高く聳え、その上方に接して高さ二二米の鶏冠状をなせる鶏冠岩があり、それと並んで俵の上に大黒像の立てるが如き大黒島がある。左には岩石の割目に沿うて出来た竜潜窟があり、それに隣て岸高きところに出来た自然洞の仙遊洞が見える。洞の下あたりは紺碧の深淵をなして瀞中最も深く涵玉潭と称する。そこを過ぐると左には釜島があり、右には六枚屏風に続いて虎島があり、白色と暗褐色の部分が帯状に互層をなして縞状となり、虎皮の如き観をなすので虎斑島とも称して居る」[139] と、ある。ここに紹介された夫婦岩・蓮華島・亀岩・滑り岩・屏風岩・烏帽子岩・天の岩戸・昼島・天柱岩・鶏冠岩・大黒島・竜潜窟・仙遊洞・涵玉潭・虎島は、今なお観光船での案内ポイントとして受け継がれている。

下瀞の終点が奈良･和歌山･三重の三県境に位置する田戸集落（奈良県）である。ここには、瀞ホテルと瀞亭があって、上瀞を見て本宮へ廻る人はここで昼食し、奥瀞を探勝する人はここに宿泊する、と紹介する。その建物は、目もくらむような断崖絶壁に今も建っている。

上瀞については、「岸壁の高さも碧淵の深さも下瀞より劣り、峡谷性の美観を減ずるが、一面また変つた淡楚な趣がある。水浅くして瀬をなすところ多く、水量の少ない時はプロペラ船の上下にも困難であるが、水は飽くまで清く美しく、礫の数もかぞへられる程である」[140] と、淡楚な趣を述べる。

奥瀞については、「小松峡を入口として更に激流恰も滝をなして岩石を打つ音乗りの滝や、蜿蜒数丁に亙りて本流に向つて狂奔する支流が怒つて数十の滝をなす小松ナイヤガラなどがあり、奔湍激流の特徴を有する峡谷美をなして居るが、未だ一般には探勝されて居らぬのである」[141] と、奔湍激流の峡谷美を述べるが、上瀞からプロペラ船は引返すので奥瀞の探勝には小舟を雇はねばならない旨を記す。

熊野川の九里峡は、新宮（字乙基磧）から宮井（熊野川と北山川の合流点）付近までの峡谷である。九里峡については、「峻峰聳え、瀑布相望み、山水の景がよい。沿岸の名所を下流から列挙すると、左岸に御船島、乙基の渡、桧杖、飛雪滝、三重の滝、楊枝薬師があり、右岸には昼島、釣鐘岩、白見滝、布引の滝、猪倉、音川がある」[142] と、数々の名所を紹介する。しかしながら、現在、それらの地は観光地として世人から忘れられている。

最後に温泉についての記述を紹介する。勝浦付近の諸温泉については、「勝浦及付近には越の湯、浦島、外の湯、貴志の湯、渚湯、越瀬の諸温泉がある。赤島、薬師、弁天は今休業中である。何れも温泉と名を同じくする旅館があり、勝浦桟橋との間に旅館所属のものやその他の汽船の便がある」[143] と、それぞれの温泉名を紹介するとともに、勝浦温泉浴客の楽しみに「紀の松島めぐり」の舟遊びがあったことを述べる。

湯川温泉については、「温泉は海水深く湾入して殆ど湖水かと思はるる湯川湾の畔に湧出し、浜の湯、磯の湯、中の湯がある。（中略）入海の岸には桜樹が多く、花の頃はこの地第一の賑ひを見せる。入海の口には青松林立して波静かなる二河の大浜があり、夏期は海水浴が行はれる」[144] と、風光明媚な海岸風景の中の温泉地であることを記す。

川湯温泉については、「温泉は十津川の支流大塔川左岸の川床に湧出し、そこに浴槽を設けてあるが、付近半粁余の間は河原の砂を掘りて随所に湯壺をつくり、石を枕に月を眺め河鹿を聞くことが出来る」[145] と、川床に湧出する風流な温泉である旨を記す。

湯峯温泉については、「熊野本宮参詣者の湯垢離場として尊まれた。（中略）土地では炊事に利用して米麦野菜等を茹でて居る。朝夕は温泉の湧出量を増し、濛々と立ち昇る湯気家々の軒をかすめて一種神秘の感を起させる」[146] と、山里の風情を述べるとともに、一遍上人が熊野参詣の折に留錫した故事や、小栗判官兼氏が妻照手に伴われて相模国から湯峯に入浴して病を癒したという伝説をも紹介する。

8．大山国立公園

大山国立公園は、伯耆大山を中心として、船上山等の山岳とその山麓をめぐる雄大な裾野の風景に恵まれる地である。大山国立公園の記述項目は、他の国立公園と比べるとごくわずかである。ここでは、大山の記述を紹介する。

伯耆の名山として秀麗な山容をみせる大山については、「白山火山脈に属する雄大な休火山で、伯耆の中央四〇方粁の地域に亙る一大火山彙の主峯である。海抜一、〇〇〇米付近までは優美な裾野を曳き、それ以上凡そ七〇〇米は急峻で裾野との限界が明かである」[147] と、裾野と山腹・山頂の違いを記す。その山姿については、「山頂は南東に向つて一大連嶺をなし烏ヶ山、兜ヶ山などとなり、東方の船上山頂まで連亙し、内方は大爆裂孔をなし、頂上より北方大山村方面に向つて蹄鉄形に開口して居る。大山は東方から望むと、山姿突兀として峻嶮を極めるが、西方からは富士式の山容を聳え、伯耆富士の別名がある」[148] と、火山活動により形成された山頂の景観を述べ、眺める方向から山の姿が大いに異なることを指摘する。

植生・地質については、「裾野は概ね草原で、山腹は落葉松の植林の外ぶな、楢などの原生林が所々に散在し山頂付近は概ね熔岩礫帯で、山肌を表して居る」[149] と、裾野・山腹・山頂の違いを記述する。また、天然記念物の大山きゃらぼく純林について、「大山の絶頂にあり、（中略）面積約八〇〇アールを占め、遠く望めば一面暗緑色を呈して居る」[150] と記し、弥山、三鈷峯等にも存在することを紹介する。

大山山頂からの眺望[151] は雄大で、日本海や中国山地の連山が見渡すことができることにも触れる。また、冬季積雪が多い大山の裾野一帯は山陰唯一の好スキー地として知られており、大山寺付近がスキーの根拠地となり、合宿訓練が盛んである旨を述べる。

9．瀬戸内海国立公園

戦前の瀬戸内海国立公園の範囲は、東は香川県の小豆島、西は広島県の鞆の浦に至る備讃瀬戸を中心とする限られたものであった。そこには、香川県小豆島の寒霞渓、同高松市外の屋島・五剣山、岡山県下津井の鷲羽山、広島県鞆の浦・仙酔島などの瀬戸内海の眺望に優れた景勝地があり、なかでも寒霞渓・鷲羽山・仙酔島は名勝に指定されていた。

山河を巡る旅という視点から瀬戸内海をみると、第一に寒霞渓の渓谷美を挙げることができる。ところが、それ以外は該当するものが少なく、多島海の景観美がこの国立公園を特色

づけている。ここでは、寒霞渓に絞って紹介したい。

寒霞渓については、「海抜凡そ五六〇米、関西の勝区にして、全山の地質花崗岩その基礎を構成し、集塊岩これを被覆し、大気水蝕の作用によつて峰巒奇絶怪巖秀絶、松杉雑樹その間を点綴して澗水流れ、一歩進めば一景を呈し、渓山の勝その妙を極めて耶馬渓を凌ぐと称され、表十二景、裏八景に分れて居る」[152] と、記す。名所である表十二景は、中腹から山頂に向かって、通天窓・紅雲亭・錦屏風・老杉洞・蟾蜍岩・玉筍峰・画帖石・層雲壇・荷葉岳・女羅壁・烏帽子岩・四望頂と続く。また、裏八景は、鹿岩・松茸岩・石門・大師洞・幟岳・大亀岩・二見岩・螺貝岩であり、いずれもそれぞれの名所を結ぶ探勝路が整備されている。

探勝の季節は、「この景勝四季孰れも観賞によいが、秋季紅葉に燃ゆる時を以て第一とし、初夏頂上一帯に於ける躑躅の美観もまた掬すべきものである」[153] と、秋の紅葉期が最も良く初夏のツツジも手に取って味わうべきものである、と記す。また、眺望については、「山嶺は四望頂と云ひ、海上の眺望雄大にして、芭蕉の名吟を刻せる猿蓑の碑があり、俳人可大の書である。また山腹にある神懸山名称碑は中桐儉吉の撰文である」[154] と、瀬戸内海の眺めの雄大さを記す。山頂には、四望頂をはじめ四つの展望台があり、眼下に地殻変動や侵食作用により形成された断崖や奇岩の眺望も楽しむことができる。四望頂にある芭蕉句碑「初しぐれ　猿も小蓑を　ほしげ也」は、安政 2 年（1855）、可大（名古屋の俳人）が来訪して書き示したものという。当時、山腹にあった神懸山名称碑は現在、山頂の展望台に移されている。

なお、古くは神懸山と呼ばれていたこの地を寒霞渓と命名したのは、明治初期の儒学者・藤沢南岳である。明治 7 年、地元の医師で文人でもある中桐絢海が有志と図って中腹に紅雲亭を建てているが、そのころから寒霞渓を探勝する人が少なくなかったことを物語る。また、明治 31 年に絢海は「神懸山保勝会」を結成し、初代会長として周囲の環境の整備に尽力する。そして、大正 12 年、寒霞渓は国の名勝に指定され、瀬戸内海を代表する景勝地としてその名が広く知れ渡るのである。

10. 雲仙国立公園

雲仙国立公園では、雲仙温泉を中心に、山岳（雲仙岳）、植物（原生沼沼野植物群落・地獄地帯しろどうだん群落・池の原みやまきりしま群落・野岳いぬつげ群落・普賢岳紅葉樹林）等について記述する。雲仙へは、雲仙鉄道小浜駅および島原鉄道島原湊駅から自動車の便があった。[155]

最初に、雲仙岳とともに国立公園の中核をなす雲仙温泉の記述からみていこう。温泉地帯は雲仙国立公園の中心地で、国立公園事務所があって観光客の利便を図っていた。雲仙温泉は新湯・古湯・小地獄の三か所にわかれており、「新湯は明治十一年の開拓で近代的設備を整へ、主に夏期外人の避暑客を迎ふる為、その環境は凡てが外人向で、ホテルも洋式のみであったが、近年日本室を設くるものも多く、また、日本式旅館を見る様になった。古湯は新湯と地を接して最も古き歴史を有し、行基開基と伝ふる大乗院満明寺の盛時より利用せられたものらしく、寺は島原の乱の為灰燼に帰し、今釈迦堂にその名残を止むるばかりである。新湯の外人向に対してはここは邦人向の旅館のみである。小地獄は新湯の南一粁あまり、享

保年間の開湯と伝へ、木賃式の宿が多い」[156] と、三湯の歴史とそれぞれの特徴を述べ、雲仙温泉には明治 10 年代初頭から外国人避暑客が増え、新湯には外国人向きのホテルが建ち並んだ旨が記されている。[157] 雲仙は、長崎滞在の英米の欧人が訪れる避暑地であった。この外国人避暑客を対象に開発された温泉街も、昭和初年には日本人も大勢訪れるようになって大衆化が進んだことを、「近年日本室を設くるものも多く、また、日本式旅館を見る様になった」の記述から読み取ることができる。

また、温泉付近には、「ゴルフ場、テニスコート、娯楽場、プール、大弓場あり、登山には乗馬、駕籠の便もある」[158] と記され、雲仙温泉は湯に浸るとともにスポーツや娯楽を楽しむ場であったことがうかがえる。ゴルフ場とテニスコートは、大正 2 年に長崎県が設置したものである。また、娯楽場（雲仙娯楽館）は、外国人避暑客が礼拝や集会を行い、舞踏会や映画会を楽しむ施設であり、そこにはピアノやチェス・麻雀などの娯楽遊具が備えられていた、という。

雲仙温泉で有名なものは、「雲仙地獄」と称する、噴煙を上げる火山景観である。その光景について、「新湯付近には三十余の噴気孔点在し、清七地獄、八万地獄、お糸地獄、大叫喚地獄、邪見地獄などの名あり、盛に水蒸気や硫化水素瓦斯を噴出し、濛々たる白烟は四周の緑樹と相映じて温泉気分を濃厚にする。この一帯の緑樹塊岩の奇景は自然の庭園をなして居るが、逍遥道路を設けて浴客の散策に便して居る」[159] と、それぞれ「地獄」の呼称を紹介し、水蒸気や硫化水素ガスを噴出する様を述べる。ここに紹介された「地獄」と称する数々の噴気孔は、今も雲仙温泉を代表する観光名所となっている。

次いで、山岳（雲仙岳）の記述を見ていきたい。「雲仙岳は九州に於ける代表的遊覧地として景勝地として、日本八景の一つに選ばれ、また既に国立公園に指定せられ、あまねく世に知られて居る。（中略）雲仙岳は妙見、国見、野岳、矢岳、普賢等の群峯からなり、就中普賢岳は最も高く、雲仙登山はこの最高峯の普賢岳へ登るのである」[160] と、最高峰が普賢岳であり、山々は四面海に囲まれ水平線上から空高く聳える雄峰である、とその景観上の特色を述べる。また、普賢岳からの眺望 [161] について、海と陸、島と山の展望が優れているのが特色である、と述べる。さらに、春のつつじ、秋の紅葉は全山美観を呈し、冬の霧氷の美観も有名であることを記す。普賢岳へは、雲仙温泉から約 6 キロメートル、2 時間半の行程で登山ができた。

雲仙国立公園には、指定天然記念物である原生沼沼野植物群落・地獄地帯シロドウダン群落・池の原ミヤマキリシマ群落・野岳イヌツゲ群落・普賢岳紅葉樹林の記述がある。いずれの記述も、地質・植生に力を注ぎ、観光案内としての誘い的な表現はほとんど見られない。これは本書の見識であろう。

その一つである普賢岳紅葉樹林は、普賢岳を中心として、その外輪山である江丸岳、妙見岳、国見岳の紅葉樹林一帯を包含するもので、当時、すでに仁田峠が紅葉の展望所となっていたことが記述にあらわれる。また、仁田峠から普賢岳頂上までの景観について、「赤松谷、薊谷、鬼人谷の三大谿谷があつて深山性樹木繁茂し、殊に紅葉植物の種類は六十五種の多きに上り、秋季は全山燃ゆるやうな壮観を呈する」[162] と、その自然美を称える。

近代に入り長崎滞在の外国人避暑客が訪れるようになった雲仙は、明治 44 年、長崎県が県営公園として施設の充実を図り、大正 2 年には県営雲仙ゴルフ場、県営雲仙テニスコート

を開設して、観光地の基礎が築かれた。昭和2年、雲仙は「日本新八景」山岳の部で第一位に選ばれ、その頃起こっていた国立公園指定運動に弾みがつき、昭和9年、瀬戸内海、霧島とともに我が国最初の国立公園に指定されたのである。自然が豊富で眺望に恵まれた保養地としての性格が、観光地雲仙の基礎にあった、といえよう。

11. 阿蘇国立公園

阿蘇国立公園は、阿蘇山を中心に、その東北に位置する久住山等を含み、阿蘇の大噴火口とその周辺に湧出する温泉に特色づけられる公園である。阿蘇国立公園では、山岳（阿蘇山・阿蘇の火口・根子岳・久住山）、温泉（内牧温泉・湯の谷温泉・戸下温泉・栃木温泉・垂玉温泉・地獄温泉・久住山諸温泉）の記載が中心である。

阿蘇山への交通路については、かつては宮地口[163]が表登山口として賑わっていたが、自動車路の開通後、豊肥線坊中駅から噴火口下まで省線バス利用が中心になり、多くの観光客が坊中登山口[164]を利用するようになった変化を記す。他に立野口[165]、阿蘇下田口[166]、高森口[167]の登山口があった。いずれの登山口からも風景がよく、「山麓帯から草千里付近までは美しい裾野の緑のスロープの連続で、概ね放牧地であるから、牛馬の和やかに草を追ふ牧歌的風景に富んで居る」[168]と、阿蘇ならではの牧歌的風景が味わえることを記す。

阿蘇山と久住山の眺望地点として遠見ヶ鼻（大観峯）を挙げ、そこからの見晴しは、「阿蘇外輪山の一峯で、火口原と中央火口、高岳、根子岳を大観するに最もよき地点で、一面久住山の連峯も望まれ、眺観雄大なる展望台である」[169]と、雄大な様を記す。なお、従来、遠見ヶ鼻と呼ばれていたこの地は、大正11年にこの地を訪れた徳富蘇峰が「大観峰」と名づけた、という。

阿蘇山（高岳・中岳・烏帽子岳・杵島岳・往生岳・根子岳）については、噴火口および中岳・高岳・根子岳を中心に記述する。西巌殿寺の本堂から火口までの景観については、「本堂付近からは火山灰と熔岩礫の灰褐色の山肌を表して僅かに『いたどり』を見る位である。（中略）本堂から火口まで約二十分の登り、熔岩礫の間に昭和八年二月大噴火の際の火山弾が点々して居る」[170]と、熔岩礫の山肌に噴火の際の噴出物が残存している様を記す。なお、当時、本堂付近に数軒の休憩小屋、土産品売店があったことも併記する。

阿蘇山火口[171]については、「噴火口は五箇の火口からなつて居るが、大体二つの火口が最も著しく物凄い火口壁を聳立して居る。（中略）第一火口は直径六〇〇米、深さ一三〇米の円形で熱泥が沸騰して居る。第二火口には瓦斯と水蒸気を数孔から噴出し、火山灰をも噴いて居る。時に猛烈な活動に依り壮観を呈することもあるが、平常は比較的静穏で案外噴煙の少い時もあり、黒煙天を蔽ふ壮観を見ることは常に期待することは出来ない」[172]と、第一火口と第二火口の姿を記すとともに、噴火の様は常に期待できない、とクギを刺す。この記述から、火口から立ち上がる噴煙もまた阿蘇山の観光資源になっていたことを読み取ることができる。

中岳・高岳については眺望の記述が中心であるが、根子岳については、「山頂は百二十余の岩のピークが鋸歯状に乱立して岩峰を峙てて居るのは壮観であり、登高心をそそつて居る。（中略）植物は阿蘇の他の山が草原と熔岩とのみであるのに根子岳は美しき衣をまとひ稍そ

の種類も多い」[173] と、他の山との景観や植生の違いを記す。

久住山群（久住山・大船山・九重山・三俣山・平治岳・黒岳等）については、「山頂付近には高山植物も相当豊富で『こけもも』等は近畿以西ではこの山に見るのみであり。山頂から千里浜一帯に群落がある、深山きりしま甚だ多く、（中略）その美観は雲仙岳より遥かに優れて居る。また十二月から一月にかけての霧氷は頗る壮観であり、山腹帯も紅葉美に富んで居る」[174] と、山頂付近の高山植物、冬の霧氷、紅葉の魅力について述べる。さらに、山頂からの眺望が優れており、山麓には雄大な久住高原や飯田高原があって、キャンプやスキーに適す、と併記する。

阿蘇国立公園には多くの温泉が湧出している。阿蘇山周辺には内牧温泉をはじめ、湯の谷温泉・戸下温泉・栃木温泉・垂玉温泉・地獄温泉があり、久住山周辺にも諸温泉が散在する。なかでも、当時、旅館十数軒を数えた内牧温泉が有名で、「雄大なる阿蘇五岳及屏風なす外輪山一帯が望まれる。（中略）五岳観望の勝地として近年宣伝せらるる大観峯―遠見ヶ鼻はここから近い」[175] と、記す。その他、烏帽子岳の中腹にある湯の谷温泉、白川と緑川の合流点で渓流に臨む戸下温泉、白川に臨む栃木温泉、阿蘇登山道栃木口の中途にある垂玉温泉、垂玉温泉から坂一つ越えた夜峯の中腹にある地獄温泉を紹介する。

久住山の山麓、久住、飯田両高原にも温泉や鉱泉がいたるところに湧出しており、次の紹介記事がある。「久住方面には肥後阿蘇郡の満願寺、田の原、黒川、奴留湯、岐の湯があり、豊後直入郡の法華院、七里田、長湯等があり、飯田方面には筋湯、星生、筌の口、宝泉寺湯、寒の地獄などがあり、国立公園施設の発展につれて幸ある将来を有して居る」[176]。ただし、これらの温泉のすべてが国立公園内にあるわけではない。この中で海抜 1,303 メートルの高所にある法華院温泉については、「山中で不便であるから設備は充分でないが、山の湯として静寂郷で盛夏尚鶯の声を聞く処、露天風呂から大船山が眺められる」[177] と、静寂な山の湯の魅力を説くとともに、温泉までは久住町から馬も行くので足弱な入浴客は多く駄馬による、と交通不便な状況を併記する。また、法華院周辺は九州唯一の好スキー地であるが、比較的交通が不便なために訪れる者は少ないが将来性のある所である、と述べる。

12. 霧島国立公園

霧島国立公園では、山岳（霧島山）中心に、植物（海棠自生地）、温泉（霧島温泉・栗野岳温泉・神宮温泉）等について記述する。霧島山は鹿児島・宮崎の二県にまたがる霧島火山群の総称で、高千穂峰・韓国岳・新燃岳・獅子戸岳などの群峰から成る。霧島山登山は、「普通霧島登山は天孫降臨の霊域として知らるる高千穂峯に登るもので、その他霧島火山中の最高峯韓国岳、または新燃山から高千穂峯への縦走などである」[178] と、記述されるように高千穂峰および韓国岳登山、新燃岳から高千穂峰縦走が一般的であった。

霧島山登山路としては、肥薩本線牧園駅から霧島温泉を経て登るもの、日豊本線霧島神宮駅から霧島神宮を経て登るもの、吉都線高原から登るものの三つがあり、「普通霧島温泉を根拠地とするが最も便利で、牧園駅からも霧島神宮駅からも霧島温泉まで自動車四十分のドライヴである」[179] と、霧島温泉を拠点とするのが便利である、と述べる。

霧島山（霧島火山群）については、「概ねその山頂には火口址を有し、円錐形の山容を聳

えて居る。また大浪池、御池、大幡池等を初め数多の火口湖が散在し、優美な裾野と高原とを持ち、山腹一帯には樅、栂等の針葉樹が茂り、山頂付近には到る処みやまきりしまの群落が多く、開花期の美観は、この山の特色の一である」[180] と、火口湖、高原、山腹の針葉樹林、ミヤマキリシマ群落の景観美を記す。

その他、天然記念物として海棠自生地について、「渓流に臨んで生じ、花は園芸種の美艶に比し清楚の趣がある」[181] と、記す。5月初旬に白い可憐な花をつけるノカイドウは、ミヤマキリシマと並び、霧島国立公園を象徴する植物として知られる。

霧島山南麓一帯に散在する霧島温泉郷については、「豊富な湧出量は我が国でも著名である。これ等の温泉を根拠地としての登山は興味が多い。既に国立公園として指定され、交通は至便で、登山路の設備もよく、比較的容易に登ることが出来る」[182] と、霧島山登山の根拠地となるとともに交通の利便性を説く。

この霧島温泉郷については、「温泉は霧島山西部の中腹海抜七六〇米の高処にあり、硫黄谷、明礬、栄之尾、林田、丸尾、砒礪燃、栗川湯、関平、鉾投、太良、新湯、手洗場、湯之野、湯殿、湯之子など十指にあまる温泉が散在して居るが、旅館の設備が整うて中心地となって居るのは硫黄谷、明礬、林田、丸尾の諸泉である。東北西の三面は鬱然たる森林に囲まれ、渓流その間を奔下するところ、熱泉白煙をあげて物凄きまでに湧出し、湯の川、湯の滝をなして居る」[183] と、散在するそれぞれの温泉名を紹介し、硫黄谷に霧島館、林田湯に林田旅館、明礬に高千穂館、丸尾湯に丸尾旅館と風景館があったことを記す。なお、霧島温泉から韓国岳までは約8キロメートル、2時間半～3時間の行程であった。また、高千穂峯へは12キロメートル、4時間の行程であった。

韓国岳登山路の途中に火山湖である大浪池がある。今日も霧島国立公園探勝客に人気の高い景勝地の一つである。大浪池については、「樅、栂等の針葉樹とぶな、水楢、いぬつげ等の混生する原生林がその内壁に急崖を飾つて、幽幻な点では九州に於て他に類例がない。秋の紅葉、春のつつじ、冬の霧氷など四季とりどりに、異彩を放つて居る。韓国岳の西南麓一帯に茂る針葉樹と、幽幻な大浪池の対照は南国の山と思へぬ景観である」[184] と、原生林と湖が醸し出す幽玄な姿を述べ、温泉客は下駄ばきでも登ることができる、と記す。

大浪池から韓国岳へは約1時間で到達する。韓国岳は、霧島の最高峰で巨大な火口址があること、および雄大な眺望[185] を述べる。

その他、健脚向きに、韓国岳から新燃岳、中岳を経て高千穂峰への縦走を紹介するが、一般向きとして霧島温泉から高千穂峰へ登るコースが紹介されている。温泉から杉林を登ると登山道に出る。そして、「河原の茶屋から高千穂峯頂上まで約一時間半行程である。灌木帯を二十分程登り、熔岩礫の急坂を登ると御鉢の火口壁に出る。この火口壁に沿うて進む、この間を馬の脊越と云ふ。（中略）馬の脊越から急な草付の斜面を登ると高千穂峯山頂に達する。この付近は特につつじが多い。山頂には天の逆鉾が木柵の中に錆びて立つて居る」[186] と、山頂に至るまでの風景を述べる。ここに記された河原の茶屋は、霧島神宮の古宮址神籬祭場のある場所で、現在、高千穂河原ビジターセンターが設置され、高千穂峰登山路の入口となっている。高千穂峰山頂からもまた雄大な眺望[187] が楽しめることを記す。

現在、霧島国立公園の主要な探勝地として韓国岳麓のえびの高原が挙げられるが、えびの

高原が開発されるのは昭和20年代後半以降のことで[188]、昭和初年の段階ではほとんど注目されていなかったことが、記載がないことから確認できる。

まとめ

山河を巡る旅が、昭和期に入って国立公園を対象とする自然を巡る観光旅行にいかに展開をみせたかを整理すると、以下のとおりである。

阿寒国立公園では、阿寒・屈斜路・摩周の三湖をはじめ、雌阿寒岳・雄阿寒岳・摩周岳など湖の景観に重要な役割を演ずる山岳、湖畔に散在する温泉群、周囲に広がる原始林の自然美が主要な観光資源として把握されている。昭和初年、弟子屈から阿寒湖に至るエゾマツやトドマツなどの原始林の中を通り抜ける横断道路が開削され、阿寒国立公園の探勝がきわめて便利になったことを記述から知ることができる。

大雪山国立公園では、「神々の遊ぶ庭」と称される大雪火山群や十勝火山群などの雄大な山岳景観や層雲峡などの峡谷美が主要な観光資源として把握されている。併せて山麓は登山基地となり、スキーが楽しめる複数の温泉地を控える魅力を秘めていた。「北海道の大屋根」ともいわれる大自然のみならず、自然利用の多様な魅力がのちに観光地として発展する一要因になった、と指摘できる。

十和田国立公園では、十和田湖と奥入瀬渓流が東北地方有数の山水の美として知られた。十和田湖における湖上遊覧のコースは、子ノ口から御倉、中山の二半島を経巡りその景観美を楽しみ、休屋に立寄り生出に至るものであった。また、奥入瀬渓流の探勝は、焼山から始まり、三乱の流から阿修羅の流・八十島を経て裸渡橋に至り、雲井の滝から銚子の滝までの数々の滝を巡るものであった。十和田湖、奥入瀬渓流とも、主な見所と観光方式はすでに昭和初期に確立されていたことが、記載から明らかになる。

日光国立公園における奥日光の自然は、明治30年代に華厳滝が傑出した風景として知られるようになった。一方、尾瀬沼・尾瀬ヶ原においても、湿原植物の宝庫として明治末期から知られ、自然を愛するハイキング客人気の場所となっていた。早くから注目を集めていた奥日光の自然は、首都圏から近いということもあって、やがて大勢の人が訪れる観光地としての性格を帯びていく。

富士箱根国立公園における箱根は、火山景観に特色づけられる山岳・湖・温泉と豊富な資源をもっており、それらが山河を巡る観光旅行の手軽な行先として恰好な場所として登場した。「箱根十一湯」は、いずれも山水の美に長けており、湯に浸りつつ付近を逍遥して山水の美を愛でることができた。周囲の自然とともに湯を楽しむという観光方式を記述から読み取ることができる。

中部山岳国立公園において手軽な観光地として賑わうようになった場所は、上高地渓谷をはじめ、白馬岳・立山・黒部渓谷である。かつては近寄りがたかったこれらの地も、交通の便が整えられると、老若男女が容易に足を運ぶことができる観光地となった。槍ヶ岳・穂高岳などへの登山基地である上高地は、山岳・森林・湖沼・高原・渓流・瀑布・温泉など、あらゆる風景の魅力が詰まっており、昭和初期に観光地化されつつあった。また、登山が比較的容易な白馬は、大雪渓・お花畑・展望とさまざまな魅力があり、特に婦女子の登山者が多

いことは日本アルプス中随一であった。すでに昭和初期に白馬の観光地化が始まっていたことを示唆することを記述から読み取ることができる。

吉野熊野国立公園の山水の美を集める場所として、北山川の瀞峡が有名である。瀞峡においては下瀞の断崖深淵、上瀞の深淵と浅瀬の変化、奥瀞の激流とそれぞれ特徴がある。そして、瀞峡の風景美はその清き水と、奇しき岩と、緑深き老木との三つが諧調をなすところにある、とその風景美は把握されていた。また、当時、プロペラ船に乗って峡谷美を鑑賞する観光方式が行われていた。

大山国立公園の記述項目はきわめて少ない。秀麗な山容をみせる大山は、山岳とその山麓をめぐる雄大な裾野の風景で特色づけられる。当時、大山の裾野一帯は山陰唯一の好スキー地として知られており、大山寺付近がスキーの根拠地となっていた。

瀬戸内海国立公園を山河を巡る旅という視点からみると、第一に寒霞渓の渓谷美を挙げることができる。ところが、それ以外は該当するものが少なく、多島海の景観美がこの国立公園を特色づけている。寒霞渓における地殻変動や侵食作用により形成された断崖や奇岩の数々は、表十二景、裏八景として探勝者の目を楽しませ、渓山の勝景を味わう観光地となっていった。

雲仙国立公園は、明治期に外国人避暑客を対象に新湯が開発され、昭和初年には日本人も大勢訪れるようになって大衆化が進んだことを記述から読み取ることができる。また、温泉付近には、ゴルフ場・テニスコート・娯楽場・プール・大弓場などが設置されるとともに、容易に普賢岳登山を楽しむことができた。雲仙は、湯に浸るとともにスポーツ・娯楽・登山を楽しむ場でもあり、自然が豊富で眺望に恵まれた保養地としての性格が観光地の基礎にあった、と指摘できる。

阿蘇国立公園は、世界有数の阿蘇の大噴火口とその周辺に湧出する温泉に特色づけられる。阿蘇山火口から立ち上がる噴煙もまた、阿蘇山の主要な観光資源になっていたことを記述から読み取ることができる。また、広大な裾野に広がる牧歌的風景も阿蘇の魅力を惹きたてる観光資源として捉えられていたことも明らかになる。

霧島国立公園は、霧島山（霧島火山群）南麓一帯に散在する霧島温泉郷や、この温泉を根拠地として登る霧島登山（高千穂峰、韓国岳等）が利用の中心であった。一帯は、火口湖・高原・山腹の針葉樹林等の景観美に恵まれており、ミヤマキリシマ群落もその名を知られていた。現在、霧島国立公園の主要な探勝地として韓国岳麓のえびの高原が挙げられるが、本書には記載がない。えびの高原が開発されるのは戦後のことであった。

以上を総合すると、戦前に指定された12国立公園の大半において、火山活動で生成された多様な景観が観光名所となり、かつ火山活動の結果生じた温泉と一体化した観光地として形成され、それらの風景の妙味を探勝する旅行が昭和初期に展開されていた様子を『日本案記』の記述から想起することができる。

謝辞

本稿は、愛知淑徳大学研究助成「景観を中心とする観光資源に関する基礎的研究」（平成24～25年度）の研究成果である。助成金を活用して、調査研究の一環として本稿で取り上

げた国立公園の景観を実際に見学できたのは、得難い経験であった。記して、研究費をいただいた大学当局に感謝申し上げる。

注

1) 谷沢明「『クーポンで國立公園めぐり』に見る遊覧旅行の一考察―大正～昭和初期における観光文化研究」（『愛知淑徳大学論集―交流文化学部篇』第4号、2014年、所収）
2) 谷沢明「『日本案内記』に見る国立公園の旅行記事に関する一考察（1）―昭和初期における観光文化研究―」（『愛知淑徳大学論集―グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科篇』第4号、2014年、所収）
3) 「釧路市内の大楽毛駅と相生線の北見相生駅とを繋ぐ自動車路線によるもの、この線は途中雄別炭鉱鉄道の舌辛駅に立寄るから、釧路駅で同鉄道に乗換へて舌辛から自動車に乗継いでもよい。この路途は雌阿寒岳の東側山腹を越えて阿寒湖畔に達する」と記載されている。
4) 「右の反対経路で網走本線美幌駅で相生線に乗換へ、北見相生駅下車、釧北峠を越えて阿寒湖畔に達する。湖畔から雄阿寒温泉へも自動車路線がある」と記載されている。
5) 「美幌駅から美幌峠を越え、屈斜路湖畔を経、仁伏、川湯温泉を通り、アトサヌプリ山の東を過ぎて釧網線と併び、南下して弟子屈に至る自動車路線によるもの、この線は途中和琴半島の東六粁余の屈斜路湖畔サツテキナイ部落から川湯温泉を迂廻せず、直ちに弟子屈へ連絡する路線を分岐して居る。この路途で入れば先ず美幌峠の大眺観に接して公園区域に入る」と記載されている。
6) 「右の反対経路で釧網線の弟子屈または川湯駅下車、自動車路線を利用する」と記載されている。
7) 鉄道省『日本案内記北海道篇』昭和11年、p 278
8) 前掲7)、p 282
9) 前掲7)、p 286～287
10) 前掲7)、p 279
11) 前掲7)、p 283
12) 前掲7)、p 283～285
13) 前掲7)、p 283～285
14) 雄阿寒岳からの眺望は、「山頂からは阿寒湖を眼下に俯瞰して、雌阿寒岳の山容を間近に望んで、パンケ、ペンケの湖水が黒い森林帯に輝き、遠く屈斜路湖を始め、斜里岳、摩周岳などが望める。南は釧路平野を隔てて太平洋が霞み、十勝の大平原を望見することが出来る」と記載されている。
15) 前掲7)、p 279
16) 摩周岳からの眺望は、「頂上からの視野は頗る広濶雄大で、太平洋及オホーツク海の波光を見ることが出来る」と記載されている。
17) 前掲7)、p 285～286。硫黄山の噴気孔については、「その大なるものは直径一米、高さ二米の硫黄塔を築き、その上端から噴煙して居る」と併記する。
18) 前掲7)、p 285～286
19) 前掲7)、p 286
20) 阿寒湖畔に最初に温泉宿が開業したのは明治45年のこと。造材関係者と稀に訪れる登山客に宿を提供したのがはじまり、という。
21) 前掲7)、p 279～282
22) ボッケとは、アイヌ語の「ポフケ」（煮え立つ）に由来する泥火山のことである。
23) 前掲7)、p 282
24) 前掲7)、p 285
25) 川湯温泉は、明治19年に最初の温泉旅館が開業するが、硫黄山で働く人夫などにより賭博場と化して廃業。その後、明治37年に越後出身者が次の宿を開いたという。当初は、湯治客を対象とする温泉であった。今日、阿寒国立公園において最大の宿泊拠点となっている川湯温泉には、当時7軒の旅館が営業していた。
26) 前掲7)、p 286
27) 前掲7)、p 287
28) 前掲7)、p 287。屈斜路湖畔の温泉については、「国立公園施設の発展と共に将来大温泉郷となるであらう」と記載されているが、この予想は外れて、温泉街とは程遠い鄙びた湯の風情を今に伝える。
29) 前掲7)、p 279
30) 大沼は昭和33年に大沼国定公園となり、登別温泉は昭和24年に支笏洞爺国立公園に指定された。
31) 層雲峡温泉へは、「上川駅の東南二四粁、石狩川の上流いはゆる層雲峡の景勝地にあり、自動車の便がある」と記載されている。
32) 松山温泉へは、「旭川駅の東南四四粁、上川郡東川村にあり、旭川から東川まで電車、それより忠別まで自動車、忠別から徒歩約一八粁である」と記載されている。
33) 吹上温泉へは、「上富良野駅の東南約一八粁、十勝岳の中腹海抜一、〇〇〇米の高所にあり、自動車の便がある」と記載されている。

34) 然別温泉へは、「帯広の北五六粁、新得駅から分岐する北海道拓殖鉄道瓜幕駅からは北約一六粁、然別湖畔にあり、共に自動車の便がある。帯広からの自動車もその瓜幕を経て行く」と記載されている。
35) 前掲 7)、p 221
36) 前掲 7)、p 221
37) 大正末期、カラマツの苗木を食う害獣「特殊野鼠」として話題にのぼった。のちにこの動物はエゾナキウサギであると判明。昭和 3 年に野付牛営林署の職員が考案したネズミ捕り器で捕獲。珍獣として新聞紙上に紹介された。『日本案内記』執筆期に話題の動物であった。
38) 前掲 7)、p 222。また、「黒岳頂上へ三丁の処に休憩所があり、アイスクリームの売店があり間もなく黒岳頂上に達する」ともあり、アイスクリームを売る店が出るほど探勝者が訪れていた情景が想起される。
39) 前掲 7)、p 240 ～ 241。「全国的にその名を知られ、夏冬共に登山者が頗る多い」と併記する。
40) 前掲 7)、p 243。「遠く本州方面からも多くのスキー家が集る。（中略）温泉旅館は百五十名位収容出来、その他スキーの為に最近勝岳荘、白銀荘など立派なヒュッテが建てられて居る」と併記する。
41) 前掲 7)、p 241
42) 前掲 7)、p 221 ～ 222。「大部分火山性のなだらかなスロープを持ち、山頂から山腹一帯の岳樺帯は、到る処大スロープを展開して山岳スキーに適し…」と併記する。
43) 石狩岳については、「一般的である石狩側からの登路をとっても、野営を重ねて往復 6 日間かかる登山であった。以前は登山路がなくて河を遡行しての登山であったが、昭和 4 年に途中まで登山路が開かれ、石狩川渡渉によらずに登ることが可能となり登山は容易になった」と記載されている。
44) 前掲 7)、p 219
45) 前掲 7)、p 209
46) 前掲 7)、p 209
47) 前掲 7)、p 254
48) 前掲 7)、p 255
49) 前掲 7)、p 219。今日、大勢の観光客を集める層雲峡温泉には、当時、層雲閣と登仙閣の二つの旅館があった。
50) 前掲 7)、p 218。当時、愛山渓ホテルがあった。
51) 前掲 7)、p 209。当時、松山温泉駅逓があり、旅人を泊めていた。
52) 前掲 7)、p 239。当時、吹上温泉旅館があった。
53) 前掲 7)、p 254。当時、清野旅館があった。
54) 鉄道省『日本案内記東北篇』昭和 4 年、p 41。「近年交機関の発達に伴ひ、新しい名勝地が続々世人の注意を惹くやうになつて来た。中にも新八景に選ばれた十和田湖及奥入瀬の谿谷を始め、男鹿半島の西南岸、田沢湖及抱返り、山寺、笹川流、猊鼻渓、厳美渓、金華山、猪苗代湖及磐梯山の如きは特に著名なものである」と記載されている。
55) 前掲 54)、p 41
56) 奥入瀬口については、「三本木から西南奥入瀬の渓流に沿ひ十和田湖畔の子ノ口に達する。その間三八粁、途中焼山、子ノ口間一四粁は渓谷の景色がよい」と記載されている。
57) 毛馬内口については、「毛馬内駅から大湯温泉を経、北方発荷峠を越えて十和田湖生出に至る二六粁の通路で自動車の便がある」と記載されている。
58) 前掲 54)、p 172 の次に掲載。
59) 前掲 54)、p 175。「湖畔で旅館のあるは、子ノ口、休屋、生出の三箇処である」と併記する。
60) 前掲 54)、p 176。「これらの山々は山頂から湖岸まで凡べて密林で被はれ、倒にその影を湖面に映して居る」と併記する。
61) 前掲 54)、p 176 ～ 177
62) 前掲 54)、p 177
63) 前掲 54)、p 178
64) 前掲 54)、p 178
65) 前掲 54)、p 178
66) 前掲 54)、p 178 ～ 179
67) 前掲 54)、p 172
68) 前掲 54)、p 172 ～ 173
69) 前掲 54)、p 173
70) 鉄道省『日本案内記関東篇』、昭和 5 年、p 394
71) 前掲 70)、p 399
72) 前掲 70)、p 331
73) 前掲 70)、p 393
74) 前掲 70)、p 393
75) 五郎平茶屋は昭和 10 年に岩石崩落で消滅。なお、昭和 5 年に観瀑者の便を図るためにエレベーターが設置されて今日に至る。

76) 前掲 70)、 p 392
77) 前掲 70)、 p 400
78) 前掲 70)、 p 331 ～ 332
79) 前掲 70)、 p 332
80) 前掲 70)、 p 332
81) 前掲 70)、 p 334
82) 明治 39 年、植物学者の武田久吉が日本山岳会の『山岳』創刊号に「尾瀬紀行」を発表し、以来、登山愛好家に尾瀬の自然、景観が知られるようになった。大正後期～昭和初期、水力発電事業計画に伴い、尾瀬の自然保護運動が繰り広げられたことは周知のとおりである。
83) 箱根山の外輪山は、金時山・明神岳・明星岳・鷹巣山・要害山・鞍掛山・山伏峠・三国山・丸山岳が環状に連なる。
84) 前掲 70)、 p 197
85) 前掲 70)、 p 197
86) 前掲 70)、 p 197
87) 前掲 70)、 p 207
88) 前掲 70)、 p 207。「付近の岩石は一般に噴気のため作用せられて盛に分解し、初は酸化して赤褐色を呈するに過ぎないが、後には分解して玉葱の如く剥奪し、遂には全く褪色して灰白色の粘土となる。この粘土の中には黄鉄鉱の粉末を混じて黒黝色のものもある。また硫黄の結晶が見られる」と詳述する。
89) 前掲 70)、 p 205
90) 前掲 70)、 p 198
91) 前掲 70)、 p 198
92) 前掲 70)、 p 198
93) 前掲 70)、 p 200
94) 前掲 70)、 p 201
95) 前掲 70)、 p 201
96) 前掲 70)、 p 202
97) 前掲 70)、 p 202
98) 前掲 70)、 p 203
99) 前掲 70)、 p 205
100) 前掲 70)、 p 203。「付近の傾斜地一帯及国道に沿うては桜樹多く関東の吉野の名を負ひ、蓬莱山から鳳来園にかけては各種の躑躅多く、浅間山、鷹ノ巣山の山腹には楓樹多くその間には千条の滝の落つるあり、宛然一つの大遊園地を形成して居る」と併記する。
101) 前掲 70)、 p 206
102) 前掲 70)、 p 207
103) 前掲 70)、 p 207 ～ 208
104) 前掲 70)、 p 264
105) 前掲 70)、 p 264
106) 前掲 70)、 p 264
107) 前掲 70)、 p 264
108) 前掲 70)、 p 265
109) 北アルプスについては、「御嶽、乗鞍岳、槍ヶ岳、穂高岳、立山等三千米級の高山数座を初めとして、殆ど同高度の白馬岳、鹿島鎗ヶ岳、針ノ木岳、烏帽子岳、薬師岳、燕岳、大天井岳、常念岳等を抬げて高山峻嶺凡そ百座に及び、その高さ二千五百米突を超ゆるもの四十数座に上つて居る」と記載されている。
110) 鉄道省『日本案内記中部篇』、昭和 6 年、 p 72
111) 前掲 110)、 p 72
112) 前掲 110)、 p 72
113) 前掲 110)、 p 247
114) 前掲 110)、 p 247
115) 前掲 110)、 p 249
116) 前掲 110)、 p 251
117) 前掲 110)、 p 249
118) 前掲 110)、 p 253 ～ 254
119) 前掲 110)、 p 247
120) 上高地には、当時、河童橋付近の五千尺旅館、やや離れて上高地温泉ホテル、清水屋の旅館・ホテルや、売店が数軒あったことが記載されている。
121) 前掲 110)、 p 245。「付近には鬼ヶ城の奇岩、ツイドウシの鍾乳洞などあり、いづれも石灰岩から成り、小梨平の噴湯丘と共に天然記念物に指定せられて居る」と併記する。
122) 前掲 110)、 p 196

123) 前掲 110)、p 267
124) 前掲 110)、p 267
125) 前掲 110)、p 267
126) 立山連峰は、浄土山・雄山・別山・剣岳などを初めとする多くの群峰からなる。
127) 前掲 110)、p 354
128) 前掲 110)、p 355。名所の称名滝について、「深い称名川の谷が俯瞰される。直下凡そ四〇〇米に及ぶ称名滝は、三段の飛瀑を奔下して壮観である」と併記する。
129) 前掲 110)、p 356
130) 前掲 110)、p 353 ～ 354
131) 前掲 110)、p 363
132) 前掲 110)、p 364。「黒部渓谷の真髄に触れやうとするには、先づ宇奈月温泉から黒部川本流に沿うて下廊下付近を探り、平ノ小屋まで探るべきであるが、この遡行は凡そ一週間の日子を要し、相当な経験と登山技術とを必要とする」と併記する。
133) 前掲 110)、p 364
134) 前掲 2)
135) 鉄道省『日本案内記近畿篇（下)』、昭和 8 年、p 418
136) 前掲 135)、p 418
137) 前掲 135)、p 418
138) 前掲 135)、p 418
139) 前掲 135)、p 418 ～ 419
140) 前掲 135)、p 419
141) 前掲 135)、p 420
142) 前掲 135)、p 416
143) 前掲 135)、p 409
144) 前掲 135)、p 409 ～ 410
145) 前掲 135)、p 420
146) 前掲 135)、p 421
147) 鉄道省『日本案内記中国四国篇』昭和 6 年、p 260
148) 前掲 147)、p 260
149) 前掲 147)、p 260
150) 前掲 147)、p 261
151) 「山頂からは米子、淀江を初め、夜見ヶ浜、中海、日本海の展望が素晴らしく、南東は蒜山から中国の連嶺を望む展望頗る雄大である」と記載されている。
152) 前掲 147)、p 341
153) 前掲 147)、p 341
154) 前掲 147)、p 341
155) 鉄道省『日本案内記九州篇』、昭和 10 年、p 169。「雲仙鉄道小浜駅及島原鉄道島原湊駅から自動車の便があり、長崎諫早からも自動車が出る」と記載されている。
156) 前掲 155)、p 170 ～ 171
157) 前掲 155)、p 170 ～ 171。「旅館は新湯に九州ホテル、有明ホテル、雲仙ホテル、新湯ホテル、緑屋ホテル、高来ホテル、日の出ホテル等あり、九州ホテルの外は何れも日本室の設もある。日本式旅館は新湯に宮崎旅館、古湯に富貴屋、東洋館、芳仙館、湯元旅館、万屋、絹笠旅館外十数軒あり、東洋館、芳仙館には洋室の設もある」と詳述されている。
158) 前掲 155)、p 171
159) 前掲 155)、p 171
160) 前掲 155)、p 171
161) 「普賢岳頂上からは島原半島の地勢は一眸に入り、島原、有明、橘の海湾はなごやかな眺である。海上に浮ぶ白帆、天草群島は脚下に一々指摘される。東は遠く阿蘇山、久住山を望み、西は橘湾を隔てて五島の島影も望まれ、北は間近に多良岳の連嶺が島原湾に美しい裾野を曳き優美な山姿を見せて居る」と記載されている。
162) 前掲 155)、p 174
163) 宮地口については、「豊肥本線宮地駅から噴火口まで約一〇粁徒歩に依る、谷徳坊、タラタラ水、石室を経て行く。二時間半乃至三時間行程、宮地には官幣大社阿蘇神社があり、以前はここは表登山口として賑つた処である」と記載されている。
164) 前掲 155)、p 257
165) 立野口については、「豊肥本線立野駅から戸下温泉を経て栃木温泉まで自動車、戸下から直接湯の谷温泉を経て登るのもよく、この間徒歩または馬にて二時間半、湯の谷は阿蘇山中腹の山の湯で展望に優れた処である。湯の谷から約一時間で草千里に達する。そこから本堂まで四十分程度である」と記載されて

いる。

166) 阿蘇下田口については、「高森線阿蘇下田駅から地獄温泉まで自動車四十分、垂玉温泉を経て本堂まで約二時間半行程」と記載されている。

167) 高森口については、「高森線高森駅から色見、クリカラ不動、砂千里を経て火口まで一五粁、三時間行程である」と記載されている。

168) 前掲 155)、 p 258

169) 前掲 155)、 p 253

170) 前掲 155)、 p 258

171) 阿蘇山火口については、「舟形に長く南北一、二〇〇米、東西四二五米、深さ一六〇米、周廻四粁に及び、標高一、三一二米である」と記載されている。

172) 前掲 155)、 p 258

173) 前掲 155)、 p 259 ～ 260

174) 前掲 155)、 p 263

175) 前掲 155)、 p 253

176) 前掲 155)、 p 263

177) 前掲 155)、「九州第一の高所にある温泉として一仙郷を劃して居る。久住連山を探るに最も良い根拠地で、連峯何の峯へも大抵二三時間で山頂に達することが出来る」と併記する。

178) 前掲 155)、 p 323

179) 前掲 155)、 p 323

180) 前掲 155)、 p 322

181) 前掲 155)、 p 325

182) 前掲 155)、 p 322

183) 前掲 155)、 p 321 ～ 322

184) 前掲 155)、 p 324

185) 韓国岳の眺望については、「南九州一の高峯だけに頗る雄大で、遠く太平洋中の屋久島、宮ノ浦岳まで望まれ、間近に鹿児島湾、桜島、開聞岳、高隈連山を初め、北には市房山方面が望まれる」と記載されている。

186) 前掲 155)、 p 324 ～ 325

187) 高千穂峰山頂の展望については、「頗る雄大で、霧島火山群の全容から大隅、薩摩の両半島、桜島、開聞岳を初め太平洋の際涯なき展望を満喫出来る」と記載されている。

188) 県道（飯野～えびの間）開通に伴い、えびのキャンプ場が設置（昭和 29 年）された。北霧島有料道路（昭和 33 年）、霧島スカイライン（昭和 36 年）が開通して、えびの高原が霧島国立公園の新たな観光地として注目を集めるようになった。なお、戦後のえびの高原の自然・景観保全を考慮した開発に尽力した岩切章太郎の存在を忘れることはできない。